



2013年9月



ミヤザキシンヤ

2013年9月2日 月曜日

けたたましい金属音で飛び起きる。普段、けたたましいなんて言葉は使わないが、今はそう表現するしかない。何が起きているのか、必死で頭のエンジンを回転させる。音源は本日が初稼働の目覚まし時計。小学校に通う長女ヒマに買い与えた、音量が大きいだけが取り柄の安い目覚まし時計だ。夏休み明け、始業式。この日、ヒマが選択した起床時刻は6時。もちろん、朝食をとって小学校に行くには早すぎるほど早い。ヒマは早朝にマンガを読むという優雅な趣味を持っている。今朝導入された爆音目覚まし時計によって、父親であるミヤザキシンヤは強制的に同じ時刻に起床させられるという被害を被ることとなった。

昨夜は遅かった。小学校と同じく今日から始まる保育園の準備に追われていた。次女シヨンと三女サクの2人分の準備は予想以上に時間がかかり、ミヤザキシンヤの睡眠時間を刻一刻と削っていた。そうだ、ヒマの給食エプロンとナプキンにアイロンをかけなければならない。疲れているとき、急いでいるとき、事故は起こる。十分に加熱されたアイロンがミヤザキシンヤの腕をかする。やや赤みを帯びただけに見えたその箇所は、やがてミミズ腫れとなった。それは普段家事をしていないことを象徴しているようにも見えた。

不本意な時刻に起床させられたミヤザキシンヤは読書をしようと思いつく。幸い、先日まとめ買いした本が本棚に入りきれずに積んである。座椅子にもたれかかり、読書の体勢にはいる。数ページ読んだところで、意識が薄れてゆくを感じる。夜遅く朝早かったせいだけではない。もう思い出せないくらい以前より、数ヶ月は経っているだろうか、体調がすぐれない。体調がすぐれないとは、かなり遠回しな表現で、率直に言うと、体調が悪い。朝、目を開けた瞬間から体が重い。そして最近では、日中にひどい眠気に襲われることもしばしばだ。本が積みまれていること自体、この睡魔が原因のひとつでもある。

腕がハレているのに外はアメというダジャレ的矛盾の中、睡魔による積読の状況下でさらに本を買うという心理的矛盾行為を遂行すべく天神のジュンク堂に向かう。最近、坂口恭平のモバイルハウスをはじめ、田舎で月数万円のDIY的な仕事をするという生き方も考慮に入れ始めている。現在は一応会社員という肩書きだが、家計は赤字だ。危ない。家計が赤字であることも危ないが、本を買いに行った話から脱線しているのが危ない。結局、DIY的な仕事から思考が発展して、クリエイティブ・コモンズを経由して、ドミニク・チェンの「フリーカルチャーをつくるためのガイドブックークリエイティブ・コモンズによる創造の循環」にたどり着いたのだった。ジュンク堂で見かけたのを記憶しており、家で睡魔と戦うくらいならと、重い体を引きずって書店へと向かう。

保育園組は転園後しばらく慣らし保育となる。今日は昼には迎えにいかねばならない。小学校も始業式で、昼には下校となる。下校途中のヒマを捕まえて、そのまま保育園へ。家からも小学校

からも近いのが救いだ。シヨンとサクから、わからないことをお友達が教えてくれたという話を聞いて、ひと安心。ミヤザキシヤに似てて飄飄としたところがある娘たちだ。どこへ行ってもなんとかやっけていこう。帰宅すると、給食、主食は持参なのだが、を食べてきたシヨンとサクを遊ばせながら、ヒマと実家からもらったレトルトカレーを食べる。ヒマが生まれてから、自宅で作るカレーは甘口になったが、小分けされたレトルトなら辛口のカレーを食べることができる。ミヤザキシヤは辛いものが大好きなのだ。

三姉妹にプリキュア・オールスターズの録画を見せている間に読書、を試みつつ眠りに落ちる。頭も体も完全にどうかしている。常にモヤがかかったようで、頭がクリアになるということがない。まあいいとミヤザキシヤは思う。今まで無理をしすぎたし、今も逆境の最中にいる。のんびり三姉妹の相手をしながら、リハビリするでしょう。ビデオが終わると、近くの図書館へ連れて行った。しかし、ここに長くは住めない。帰って夕飯の準備をしなければ。

三姉妹と父親という、普段多くは見かけないであろう組み合わせで夕飯の材料を買いに行く。冷蔵庫にナスがあったので、一緒に炒めるための豚肉を買う。料理の経験は浅いが、包丁とコンロを使えば大抵のものができるとは知っている。帰宅中、三姉妹が姿をくらませて勝手に帰るといふ事案が発生する。絶対に怒鳴らない、必要なとき以外は怒らない、という誓いを立てている。しかし今回の事案は、三姉妹の安否に関わる。厳しい口調で注意する。ミヤザキシヤ似の飄飄とした子供たちには、どれだけ伝わったのかはわからないけれど。

おかず一品の質素すぎる夕飯を作ると、三姉妹にシャワーを浴びさせる。4人で夕飯を食べていると、妻が帰宅した。死ぬ間際には人は優しくなると言うが、別れの間際には妻も優しくなるようだ。三女サクはすっかり妻になついている。あの嵐のような日々を忘れたのだろうか。ここで妻が三姉妹に優しく接するというのは、ある意味、残酷なことのようにも思えた。急がなければ。区役所に行く日を早めることにした。

嵐のような日々の次には、嵐のような日々が待っていて、それが落ち着く前には次の嵐がくることがわかっている。その嵐の中で、飄飄とした父親と三姉妹はなんとか過ごして行くのだろうと、今は根拠のない楽観的な思いを抱えつつ、保育園の準備と提出書類の作成に追われている。

2013年9月3日 火曜日

2日目ともなると保育園の準備は格段に楽になる。異常に早起きな長女ヒマは目覚まし時計が鳴る前に起き出し、そのおかげでミヤザキシんヤは大音量のアラームに叩き起こされずに済んだのだが、ひとりで朝食を摂るとさっさと小学校に行ってしまった。保育園組を起こして朝食を食べさせる。「あまちゃん」が始まる前に食べさせないとテレビに釘付けになって食べる手が止まってしまうのは、昨日の時点で実証済みだ。前日から予約炊飯していたご飯を弁当箱に詰め、冷ますためにしばらく放置しておく。その間に、水筒を用意したり、着替えをしたり。ある程度冷めた弁当箱をリュックに詰めさせて、あたりを見渡して家を出る。

低気圧と台風の影響で、毎日毎日雨が降っている。雨傘に長靴、雨の日は保育園児の機動力が鈍る。持って行くはずだった荷物も持っていけず、父親は憂鬱な気分で、何度も振り返っては歩調を微調整しながら歩く。父親の憂鬱などお構いなしの保育園組、次女ションと三女サクは、楽しそうに傘で遊んでいる。いつからだろうか、雨の日が憂鬱になったのは。ケガをした痛いと訴えるサクの、かろうじて目に見えるくらいの小さな傷をひと目見て、心配ないと声を掛ける。多少の痛みにも動じなくなったのは、いつからだろう。それは成長なのか、それとも大切なことを失っているのか。強くなったのか、鈍くなっただけなのか、自分のことですら判断できずにいる。

帰宅する。しばらくは自分だけの時間を持てる。昨日に引き続き、読書をすることにする。会社員としての仕事もしなければならない。しかし、今それをして、まったく手につかないだろうということは想像に難くない。今のうちに中近距離の生活のイメージを膨らませること、それが最優先だ。会社員としての仕事にも好影響を与えるだろう。とは言え、もともとの体調不良に、連日の目の回る忙しさ、頭はまるでスッキリしない。あいかわらず襲ってくる睡魔と戦っているうちに、今日までが午前中授業のヒマが帰ってきた。自分だけの時間は幻のように消え去った。

昼食にインスタントラーメンを作る。麺だけじゃ栄養が足りないから野菜を入れろという妻の声の脳裏に蘇る。あわててスライサーでキャベツをスライスして鍋に投下する。キャベツの千切りが入ったラーメンなど初めて見たが、日本中のラーメン屋を探せばどこかにあるかもしれない。これからは自分で栄養管理をしなければならない。父親は身を引き締める。

大切なことを忘れてしまった大人の1人であるミヤザキシんヤは、子供の頼みごとは、たとえ馬鹿げた願いであるかに思えても、できるだけ叶えようと考えている。今日はヒマが保育園のお迎えについて行くと言うので、一緒に出かけることにした。保育園に着くと三女サクが泣いている。みんなが持っている手帳を自分だけ所持していないことに戸惑ったらしい。サクにしてみれば大事件だ。父親は大事件が起こったことを忘れてはならない。子どもたちが何に悲しみ、何に怒るのか、これからの生活の大切なヒントとなる。三姉妹を連れて保育園を後にした。

保育園は小学校の真裏にある。せっかくヒマを連れてきたのだからと、チャレンジルームに案内してもらうことにした。チャレンジルームというのは、留守家庭の児童を預かってくれる施設で、小学校の片隅に小屋が立っている。世話好きなおばちゃん風の先生に出迎えられた。パンフレットを見せられながら説明を聞く。手続きの面倒臭さよりも、その費用の高さに驚く。それでも、児童扶養手当を受けていれば、半額くらいには抑えられるらしい。資本主義に疑問を抱えながらも資本なしで生きていく自信のない資本主義経済依存症のミヤザキシキヤは、三姉妹のためといえども高額な出費には不安を感じるのだった。

チャレンジルームの手続きには時間がかかりそうだ。すぐに動き始めることにした。天神のオフィスに行って、本社に就労証明書の用紙をFAXする。そして証明書についての説明をメールする。ついでに家族構成の変更にもなう手続きの問い合わせもしておく。管理部のスタッフも、こういった手続きは初めてなんじゃないだろうか。しばらく使わないであろうiMacの電源を落とした。

母親が苦戦していた小学2年生ヒマの宿題に父親も苦戦することになる。少しでもわからないとパニックになって放り出してしまうのだ。母親がそうなるような教育、それを教育と呼べるなら、をしてきたことは知っているし、父親がそれを放置してきたことも把握している。いきなりは変えられない。ヒマとはこれからじっくり向き合って行こう。父親は覚悟を決めた。夜には三女サクがぐずり出した。ヒマだけでない。三人とも育てなおさなくてはならない。だが、今の父親の常識は、三姉妹が成長する頃には常識ではなくなっている。当たり前を押し付けてはいけない。どんな時代でも生きていける心を育てる。父親の願いはただひとつ。自分で自分のことを満たしてあげられる人間に育てて欲しい。

2013年9月4日 水曜日

別れには準備期間が必要だけれど、別れの瞬間というのは刹那的だ。それが書類上のことであればなおさらその傾向が強い。区役所に提出した離婚届はあっさりとして受理され、ミヤザキシンヤとその妻との夫婦関係は消滅した。元旦の朝、誕生日の朝、心機一転しようとする朝とは違って、用紙が受け取られた瞬間に何かが変わるといふ状況には現実感がともなわない。夫婦として区役所を訪れた二人は他人としてその場を後にした。それでも依然夫婦であるかのような二人は、近くの定食屋で昼食をとった。

1時間前まで夫だった男は、父子家庭の父親として再び区役所を訪れた。児童扶養手当についての説明を聞くが、住民票から妻だった女性の痕跡を削除しなければ手続きができないらしい。その日の手続きを諦めて、帰宅する。保育園のお迎えまではまだ時間がある。連日睡魔と戦いながらチャレンジしている読書に取り組む。あいかわらず、頭にはモヤがかかっているスッキリしない。読解力は確実に低下している。同じセンテンスを何度も往復しながら、少しずつ読み進める。しかし、この日もやはり睡魔が襲ってきて、意識を取り戻した頃にはお迎えの時間が迫っていた。

3日目になると、保育園の準備もお迎えも格段に楽になる。それでも今日は大きな教材セットを2人分運ばなければならない。自転車を使おうと決心すると同時に雨が降り出す。いったい何日目の雨だろうか。毎日のように、ではなく正確に毎日降っている。しかもこのタイミングだ。若干小降りになったところで、意を決して自転車をこぎ出す。両ハンドルには教材セットの入った紙袋。保育園に到着した頃、雨がやむ。そういうものだ。だか、悲観してはならない。一個人が自転車に乗るといふ行動が、雨が降るといふ自然現象を引き起こすことはない。ミヤザキシンヤは、それを強引に結びつけて自分は不運だと嘆くような人間ではない。

昼食時にそれまで妻だった人と小競り合いになった。夫だった人が理論だてて話をすると、妻だった人は自分が責められていると感じて反発する。夫だった人は、その構図を把握している。それでもその話し方を改めようとはしない。故意にやっているのだ。妻だった人は、これから社会に出る。もちろん専業主婦としての戦績は知っている。しかし、壁に囲まれた家庭内での戦いと、外の世界での戦いとでは、戦略と戦術を変えなければならない。妻だった人が外の世界でも戦っていけるよう、夫だった人は憎まれ役を演じながらも戦い方を伝える必要があった。むろん、それ自体が夫だった人の自己満足にすぎないことである可能性は否定できない。

夜には長女が大暴れをはじめた。長女が暴れ出すきっかけが母親であるといふのはいつものことだ。しかしこの日は大暴れが過ぎて、父親も思わず厳しい調子になる。一方で心の中はいたって冷静で、どうやってこれを鎮めるか、どうやって長女にこの状況を客観的に理解させられるか、考えを巡らせていた。小学2年生。客観的に状況を理解する能力はまだまだ発展途上にあるよう

に見える。これくらい解るはず、という前提で接すると、前提と現象の間に矛盾が生じる。母親はそれを怒りのエネルギーに変えて娘にぶつけていた。父親は考える。親の心を子が知らぬように、子の心を親が知ることもできない。親子でなくとも、夫婦でも他人同士でもそうだ。自分の当たり前が他人にも当たり前だという前提を設定するとうまくいかない。同意なしに前提を作らないことが、コミュニケーションの大前提だ。そのことを妻に伝えられなかったことが、伝えようと努力こそすれ工夫をこらさなかったことが、夫婦関係を終焉に向かわせた一因であると、嵐の過ぎ去った部屋でぼんやりと考えているミヤザキシンの姿があった。

2013年9月5日 木曜日

またもや容赦のない音量で鳴る長女ヒマの目覚まし時計に叩き起こされる。昨夜はTwitterとFacebookに張り付いていて、布団には入っていたものの、眠りに落ちるまでにはそれなりの時間を要した。重力に逆らって重たい体を持ち上げ直立二足歩行を試みる。窓の外を見る。曇ってはいるが、雨は降らなさそうに見える。まだ覚め切らない頭で、昨夜のツイートを思い出す。離婚報告したんだっけ。普段いろいろ公開して見返りを得ているのに、ネガティブ（に見える）ことだけ非公開にするのはフェアじゃないとツイートしたところまで覚えている。その後の反応はどうだったか。薬を飲んだ後はすぐに就寝しないと、記憶が飛ぶことがある。深夜のツイートは危ない。無駄に心配をかけていなければいいのだが。

小学2年生ヒマは、朝はなんでも自分で用意して、さっさと小学校に行ってしまう。まったく手がかからない。保育園組の準備にも手がかからなくなってきた。弁当箱にご飯を詰めて、水筒をお茶で満たす。その他は前日に用意しているので、とくにすることはない。朝食にトーストを食べさせると、食が進まなくてこれだけはなかなか厄介なのだが、自分で着替えを済ませてくれる。8時半には家を出て、10分ほどで保育園に着く。保育園での朝のルーチンワークを終えて、今日は自転車を出動させていたので、そのまま幼稚園へ書類を提出に行く。家に戻り自転車を置いて、地下鉄の駅へと向かう。この時点で9時過ぎだ。努力目標9時出勤には間に合わないが、10時出勤には余裕で間に合う。今後の朝の生活リズムが見えてきたように思う。

ルーチンワークをこなすのが朝の日課で、いかに効率化を図るかが重要となる。それに対して、オフィスでの仕事は、クリエイティビティが要求される。むろん衰弱した心身ではクリエイティビティを発揮できるはずもなく、企画・開発の代わりにサポート・トラブル対応に時間をあてる。やらなければならないことは多いけれども、本当にやらなければならないかと問われると答えに窮する。同じように、やりたいことも多いけれど、本当にやりたいことだろうか。ミヤザキンヤを取り巻く空間に充満する様々なメディアが、彼にやりたいことを外部から浸透させようとしているような気がしてならない。ミヤザキンヤは自分のことにフォーカスし過ぎた。30代なかば。社会のことにフォーカスしてしかるべき時期ではないだろうか。かと言って、すぐに退職しようというわけではない。まだやることがある。現在の会社員としての仕事と社会とをつなぐ、そんな方法を漠然と模索する日々が続いている。

会社員としてソフトウェア開発をしていると、スケジュール帳に文字が並ぶことは少ない。そのため稀に予定が入ると、スケジュール帳だけでなく頭の中にもしっかりと予定が記憶されることになる。今日は新卒で入社した会社の先輩と飲みに行くという予定が入っている。独立してWeb制作会社を営む先輩は、あいかわらず柔らかな物腰で、この物腰を真似しようと何度も挑戦したことを思い出す。二人の会話は、仕事の話や現在のSNS事情の話が大部分を占める。同じ業界にいるにもかかわらず、お互いに違う世界で仕事をしているように感じる。ベンチャーで一旗挙げ

ようとする、そしてクリエイターのコミュニティと積極的に関わろうとするミヤザキシンヤ。Web制作とサーバー事業でコツコツと積み上げてきた先輩。二人の間には目に見えない溝が横たわっているかのようだ。しかし、二人はかつて同じ釜の飯を食った仲間としてつながっている。断絶された世界をつないでみると、何が起こるのか。やってみよう、なんの計算も下心もなく、直感がミヤザキシンヤを動かしている。

自分のことをよくFacebookで見てもらっている。となると、当然ながら離婚のことも知っているだろう。ところが、ここまでその話題には触れられない。触れにくいのだろうか。それとも、たまたま投稿を見ていないのか。話題に触れてみた。フリーズする先輩。ホモ・サピエンスが脳内だけでなく体までもフリーズするところを初めて観察した気がする。当然、そう当然だろう、理由を聞かれる。答えに窮する。具体的にハッキリとした何かが存在するのではなく、日々の何かの積み重ねが別れを導いたのだ。ひとことで説明するのは難しい。誰も悪く言うことなく説明する術を身につけなければならない。当面の課題となりそうだ。

砂山のパラドックスというものがある。砂山から数粒の砂を取り去っても砂山には変わらない。そこからさらに砂粒を取り去っていく。まだ砂山だ。最終的に砂がひと粒だけになったとき、それは砂山だと言えるだろうか。家に帰ると、夜10時だというのに三女が放置されている。理解し難い行為だ。それを砂山から砂を取り去る行為だとしよう。砂山は依然存在する。しかし、このような行為が日々繰り返し行われる。時にはショベルカーで一気に砂が取り去られる。それでも砂山は存在する。ところがある日、数粒の砂しか残っていないことに気がつく。もはや砂山とは呼べない。砂山のパラドックスは砂山かそうでないかの境界線を引けないことが問題となるが、夫婦関係の終焉にも境界線を引くことはできない。役所に行き、砂山でなくなったことを申告することで、法律上の境界線を引くことになる。

帰宅が遅くなると、就寝が遅くなる。洗濯や翌日持たせるご飯の準備は翌日に持ち越すことができない。朝と同じように夜にもルーチンワークがあるのだが、朝とは違って帰宅時刻によってルーチンの開始時刻が前後する。割り込みタスクも朝よりも多いだろう。この辺の対応が生活リズムを設計するポイントとなりそうだ。専業主婦だったかつての妻の引っ越しは来週に迫っている。仕事への完全復帰も急ぎたい。生活リズム。生活リズム。子供3人の世話をしながらフルタイムで働く難しさ、それをどう乗り越えようか考えながら眠りについた。

2013年9月6日 金曜日

連日の雨がやむと、一気に涼しくなった。朝には肌寒さすら感じる。衣替えの時期が近づいている。三姉妹の持ち衣装は、お下がりの連鎖の影響もあって把握するのが難しい。足りないものは買い足さなければならない。ひとりでそれができるだろうか、父親はやや不安になる。下の2人が保育園に転入して1週間が経った。持って行くもののルールも分かってきたし、朝のルーチンワークも身につけてきた。長女ヒマはあいかわらず、ひとりでさっさと小学校に行ってしまう。朝はなんとかやっつけていけそうだ。

それでも慌ただしいのは変わらない。登園すると三女サクの教室、こんなに大きいとは知らずに申し込んだ保育園の3階にある、に向かう。低い階段を登りながら、すれ違うお母さんたちに挨拶を繰り返す。教室に入ると、用紙に健康状態を記入して、ホワイトボードのお知らせをチェックする。その間、サクはリュックから弁当箱を取り出して所定の場所に置く。教室の外側に取り付けられたフックにリュックを引っ掛ける。今度は二女シヨンの教室へ。1階に戻る。シヨンの教室でも同じようにルーチンワークをこなす。ここで、サクが赤白帽を忘れたことに気づく。一瞬湧いてきた嫌な気分を振り払い、再び3階へ。ネガティブな心は悪循環をもたらす。最初から相手にしないことが肝心だ。低い階段を登りながら、すれ違うお母さんたちに挨拶を繰り返す。もしかしたら、3階から降りてくるときにすでに挨拶をしていたかもしれない。思わず会釈だけになる。3階まで都合2往復したあと、園庭に出て2人を先生に引き渡す。ミッション終了。通勤のため地下鉄の駅へと向かう。

オフィスに到着すると、大きめのトラブルが待ち構えていた。すぐに調査に入る。ユーザーをがっかりさせるような状態を一刻も早く解消したい。調べてみると、明白な人的ミスであることが判明する。ミスを繰り返さない対策を検討しながら、不具合の修正に臨む。仕事も家庭もひと続きだ。ライフワークバランスなんて今日の資本主義経済の歪みを覆い隠そうとする瘡蓋でしかない。ひと続きの生活をどうデザインするか、模索している振りをしながら、実は答えは見えているのかもしれないと考えたりもする。どうであれ、これまでのライフスタイルを維持することは不可能だ。当面の、あくまで当面の、生活スタイルを大至急デザインすることが求められている。時間は十分にあったはずなのに、と、いつもと同じ類の後悔の念にかられつつ。

オフィスを早い時間に出て、かかりつけの心療内科へ。途中、ドトールの前を通ると、キャラメルマキートの広告が出ている。疲れのたまった重力に反抗するのが精一杯の体が甘いものを欲している。しかし、予約時間が迫っている。口の中に広がるバーチャルな甘味の対処に困りながら、ドトールの前を通り過ぎる。心療内科はいつからか妻の異常行動を報告する場になっていた。ミヤザキシンヤを飄飄としている、つまり俗世を超越している、と診断した心療内科医は患者の発言を逐一カルテに記録していく。もしミヤザキシンヤがストレスによる異常事態に陥っても、このカルテがあれば原因を究明するのは容易であるように思える。

心療内科から保育園に直行する予定だったが、オフィスに忘れた書類を取りに戻る。この書類がないと、留守家庭の子供をみってくれるチャレンジルームへの申し込みができない。父子家庭への支援に関する手続きは漏れなく遂行しなければならない。経済的に、精神的に、少しでも楽をしなければならない。それでも、この荒波を乗り越えるには、あまりに頼りない藁の束にしか思えないのだが。いつも通りモヤのかかった頭で、地下鉄の中で開いた本に印刷された記号の意味を理解しようと試みる。数ページもめくらないまま、目的地に到着する。保育園のお迎えにはまだ少し早い。いったん帰宅して荷物を置いて出かけようとしたところ、先に帰っていたヒマがついて来ると言い出した。子供の頼みごとは、鈍化した大人の頭で無価値だと判断したものでも、できるだけ叶えようと決心している。ヒマを連れて保育園に向かった。

保育園で帰り支度をしていると、珍しく三女サクがグズグズ言っている。トイレに行きたいが、ひとりでは行けないと言う。珍しい。こんなとき彼女の母親は、驚くほど冷酷に子供を突き放す。父親にはそれができず、なんとかなだめすかせようとする。負の感情は周囲の人々のエネルギーを減衰させる。この程度のことで、負の感情を爆発させるべきではない。園庭に目をやると、ヒマが幼稚園児に混じって遊んでいる。連れてきてよかった。父親は荒波から三姉妹を守る防波堤だ。今はまだ、ただ楽しく過ごしてくれていればいい。

そんな思いに反して、夜には声を荒げてしまった。夜はとにかく忙しい。食事の準備、入浴、次の日の炊飯、洗濯、ゴミ捨て。まあ、要するに、主婦がやっていることなのだけけれど。それを終わらせて、読書や勉強、仕事に関する諸々の時間を確保したい。いかに早く三姉妹を寝かしつけるかがポイントになる。そこで3人が騒がしくしていると、前述の通り、声を荒げることになる。いや、騒いで寝ないのは構わない。ただ、ベッドから飛び降りたり、それなりの築年数が経過したアパートの階下の住人に不快な思いをさせるのが申し訳ない。その思いが負の感情となり、口から発せられる。あまりに他人のことを気にかけすぎると、ミヤザキシンヤがそうであるように、身動きが取れなくなる。しかし、誰も得をしないかかなくていい迷惑はかけるべきではないだろう。それだけは理解して欲しい。

時系列をさかのぼることになるが、寝る前にヒマがアイロンをかけたいと言うので、かけさせることにした。アイロンがけは初めての体験だ。危なっかしいので横から細かく注意するが、ヒマはいたって楽しそう。何かにつけて、遊びじゃないんだから、と大人は言う。そうじゃない。すべて遊びでいいのだ。理想の父親像がある。「ARMS」の主人公の父親だ。主人公、高槻涼は幼少期から父親にキャンプに連れて行かれていた。そこでいつの間にか、サバイバル術や戦闘能力を身につけていたのだった。子供にとっては、何もかもが遊びだ。勉強でさえも。遊んでいるうちに、社会で生きていく術を学ばばいい。友人にストイック過ぎると評されるミヤザキシンヤは、遊び方を知らない。もっと遊ばなければ。この荒波すらも、サーファーのように楽しむ。その姿を見て、三姉妹も人生の荒波を楽しく乗りこなしていければいい。大きく腕を回し、肩の力を

抜いた。

2013年9月7日 土曜日

創造性を発揮して取り組むのが仕事だと定義するならば、今週はほとんど仕事をしていない。サポートやトラブル対応、タスクの管理など作業に当たっている。土曜日。本来であれば、今週分のロスを取り戻すために仕事をすべきだろうが、ミヤザキシンヤはいまだ創造性から遙か遠いところにいる。それに今日は、長女ヒマの矯正歯科の予約が入っているし、元妻の引っ越しにともなってお互いに家電を買い足さなければならない。午後からは忙しくなりそうだ。午前中に自分の時間を確保しよう。そう考えていたが甘かった。重たい体、モヤのかかった頭は、すでに限界を超えていた。重力に抵抗することすらままならず、座椅子を広げて横になる。モヤは頭の隅々にまでゆき届き、次第に意識が薄れてゆく。体と頭を休めなければ。大人部屋と呼ばれる聖域でウトウトしていると、三姉妹がかわるがわるやってくる。「iPadしたい」「お茶ついで」「パズル取って」そのたびに重たい体を持ち上げて対応する。それでも、しだいに頭が麻痺してきて、三姉妹の言葉に適当に返事をするも、起き上がれなくなってしまった。そうして次に目を開いた時には、12時になっている。午前中を無駄にしてしまった後悔よりも、多少は体力を回復できた安心感の方が強い。何もしない休みが必要だったというのは間違いないだろう。

午後には家族、父親と母親と子供たち、父親と母親はすでに夫婦の関係はない、5人で西新に向かう。5人で行動するのはこれが最後かもしれない。新婚の頃、長女が生まれてから、時々来ていた洋食屋に行く。ワンコインでセットメニューを食べられる洋食屋は、時間が止まったかのように当時とまったく変わらず家族を迎え入れてくれる。5人で2人分の洋食セット、ご飯大盛り。どの店に行っても同じ方法で注文する。食費もレジャー費も極限まで抑える。そうでなければ、家計を維持することが難しい。5年前の転職を期に、収入は激減した。フリーランスを続けていればもっと稼ぐことはできるかもしれない。しかし今は、会社員として取り組んでいる事業を成功させたい。それはミヤザキシンヤのわがままであって、その想いを家族に強要するのは間違っていることなのだろうとも考える。複雑な思いを胸中に押し込めて、運ばれてきたランチセットを子供たちに取り分ける。安くてボリュームがあり、味も十分満足できるレベルだ。特製クリームコロッケがうまい。2人分のセットに満足した5人は次の目的地へ向かう。

ここで父親と三姉妹はヒマの矯正歯科に向かう。母親は不動産屋に新居の鍵を受け取りに行く。矯正歯科には、玩具やコミックがたくさん置かれていて、ヒマの診察中も下の2人をおとなしくしておくことができる。父親はiPhoneで前日の日記を書いている。日記はたいていその日の夜に書くものだと思うが、なぜだか翌日に書くというスタイルをとっている。次々と入ってくる情報が渦巻く鈍った頭では、前日の夕飯のメニューすらも思い出せない。よくない兆候だと、常々感じていた。そこであえて、前日の様子を思い出して日記を書くというスタイルを採用した。思い出す。ミヤザキシンヤは長らくその行為自体を忘れていたように思える。思い出す。昨日の出来事、心の動き。思い出す。

三姉妹の母親と合流し、いったん自宅に戻る。子供たちを留守番させることにして、必要な家電をそろえるためヤマダ電機へと向かった。その途中にリサイクルショップに立ち寄る。まだ綺麗な家電が驚くほど安く売られている。最近はとくに、シェアだとか、エコだとか、サスティナブルだとかに興味を持っている。電子レンジはここで中古品を購入しよう。いちおうヤマダ電機にも行ってみる。家電コーナーを徘徊するも、電子レンジに、冷蔵庫に、洗濯機、新品を買う意味はないように思えた。電子ケトルと炊飯器だけを買って、車に積む。この車も手放す予定だ。維持費を考えると、公共の交通機関やタクシー、レンタカーを利用しても十分にお釣りがくるだろう。必要なときに必要なものを利用できれば、それを所有している必然性はない。そもそも、所有とはなんだろうか。特に土地の所有には以前から疑問を抱いていた。何時代かはわからないが、勝手に自分の土地だと言い張って、喧嘩の強いものが土地を所有している。人は生まれながらに平等ではなく、土地を持っている家に生まれれば、それを相続する権利を有する。何の根拠もなく適当に切り分けられた土地をだ。その後、ミヤザキシンヤに多大なる影響を与えている坂口恭平も、土地は所有できないと説いていることを知る。また、最近読んだ本には、土地にかぎらずすべてのもの、自分の体でさえも、借り物でしかなく所有はできないと書かれていた。極論のようにも思えるが、今のミヤザキシンヤにはそれがスッと腑に落ちる。人は現在という点に生きているのではない、過去から未来に向かう大きな流れの中を漂っているのだ。その流れの中で、コスモスで一番安い食パンを買って帰る。

夕飯は、妻、かろうじて妻の役割を果たしている、が用意してくれた。味付きの肉を焼いたものに、もやしとニンジンの炒めものを付け加える。栄養について考えること、父親に課せられた次の使命だ。5人で食卓を囲むのも、あと数回となった。と言っても、他人が思うほど感傷的でもない。妻の新居は地下鉄で1駅隣りだし、彼女はいつでも三姉妹に会おうと考えているようだ。どこかでけじめを付けるべきだと思いつつも、今は細かいことは気にしたくない。子供たちの運動会は観に来るのだろうか。ここの家の鍵は返してくれるだろうか。三姉妹の母親との距離の取り方に難しさとともに面倒くささを感じる。なるようになればいい。精神的な負担はできるだけ軽減させておかなければ、これから先はやっていけない。安いながらもおいしいものを食べながら、ある意味適当に生きていけばいいのだ。

とにかく体が重たい。今日は入浴を棄権することにした。子供たちだけでシャワーを浴びさせる。と、ここで久しぶりに母親のギアがヒステリックに入った。浴室の三女サクに理不尽な怒声を浴びせている。助けに行くべきなのだが、体が動かない。あと数日でこの核爆弾級のストレスから開放される。我慢の時間がいったい何年間続いたのだろうか。転職も余儀なくされた。心療内科で処方される安定剤で何とかやり過ごそうと試みる。ミヤザキシンヤの罪は、戦わなかったことだ。結婚11年目、ようやく戦うことを決意した先には、夫婦関係の断絶が待っていた。もっと早くにそうすべきだった。ミヤザキシンヤ本人も子供たちも深い傷を負ってしまった。罪の意識を抱えながらも、それでも最後は戦って決着をつけたことにある種の満足感を覚える。これでよかったのだ。戦いの後には復興作業が待っている。一筋縄ではいかないことはわかっている。

だが、叩きのめされては復興してきた日本人の血が流れている。きっと大丈夫だ。

2013年9月8日 日曜日

目を開けた瞬間から不快感が襲ってくる。体が重たくて起き上がれない。そんな状況が日常化していると、起床時に不調を感じないことが異常なことのようになってくる。目覚ましをかけなくとも7時ごろには目が覚めるのだが、今日はいつもと違っていた。すでに9時半をまわっているし、心なしか体の重さが軽減しているように感じる。昨日、夜動けなくなって、早めに就寝したのが良かったのかもしれない。三姉妹はプリキュアとむかし話のアニメを見終わって朝食をとるところだ。いつもより体が軽く感じるとはいえ、食欲がまったくない。朝食を抜かないというポリシーを貫いてきたミヤザキシヤは、コーヒー牛乳を自作することにする。電子ケトルに少量のお湯を沸かし、濃いコーヒーを作る。そこに冷たい牛乳を注ぐ。大人部屋と呼ばれる妻が子供たちの出入りを禁止している部屋に運ぶと、クリエイティブ・コモンズに関する本を開いてコーヒー牛乳を口に運ぶ。ミヤザキシヤの体験談もCCライセンスで公開すれば、役に立つ人がいるのだろうか。

午前中は引き続き読書をしたり日記を書いたりして過ごす。子どもたちは公園に遊びに行っている。妻はあいかわらず夜更かしして昼になっても起きる気配がない。フライパンに水を沸かす。昼食はパスタにしよう。パスタも茹でられる魔法のフライパンを使うと、料理経験の浅い父親でも簡単に調理をすることができる。このフライパンと圧力鍋があれば、何とかやっていける気がする。ソースはもちろんレトルトだ。すぐに4人分のパスタができあがる。子供たちは帰ってこない。ベランダから声をかけるも、遊びに夢中な三姉妹は父親の言うことなど聞きはしない。朝食がコーヒー牛乳ではさすがに腹が減っていて、ひとりでパスタを食べ始める。いつまでもレトルト食品に頼るわけにはいかない、と思う。クックパッドのアプリをインストールしておこう。ユーザー登録もしておこう。買い物はどうでしょうか。オフィスでの仕事時間は削りたくない。週末のまとめ買いでどうにかなるだろうか。料理も比較的余裕のある時に下ごしらえしておいて、食べる直前に仕上げるようなメニューが望ましい。やっぱりクックパッドに頼ることにしよう。Ruby on Railsでの開発で、技術者として大いにお世話になっている。料理をする者としてもお世話になることになることは、まったく予想していないことだった。

午後からは三姉妹、ビデオを観てもいいと言うと喜んで留守番をする子たち、を置いて家電を買いに行く。電子レンジは妻が持っていくというので、電子レンジを我が家に。洗濯機と冷蔵庫と、その他もろもろは妻の新居に。この時点で、妻と呼んでいることに違和感を覚えつつ。区役所で確認したところ、子から見た続柄は母のままで問題ないそうだ。そうすると、子供たちの母親と呼ぶのが一番正確なのかもしれない。前日にリサイクルショップとヤマダ電機を比較していたので、今日は迷わずリサイクルショップへ向かう。すぐに壊れてもいいかというくらいの価格で電子レンジを調達する。洗濯機と冷蔵庫もよさそうなものが見つかった。配達是一片につき千円と高めに設定してある。常にできるだけ出費しないように行動してきた元夫婦は迷わず無料の軽トラックを借りる。駐車場から道路に出るときに年配の男性を轆きそうになったことを除けば、

問題なく元妻の新居にたどり着くことができた。問題はここからだ。コインパーキングに軽トラックを停めて、洗濯機と冷蔵庫を運ぶ。安アパートの2階。もちろんエレベーターはない。狭い階段を2人がかりで何とか運び上げる。今日が、体の重い日でなくてよかった。それでも、大物2点を運び終えてパーキングに戻るときには、自動販売機でリアルゴールドを買わざるをえない。しかし、運転に支障が出るほどの疲れは溜まっていない。誰も轢き殺すことなくリサイクルショップに帰還する。今度は自分の車に乗り込み、家に帰る。途中、健康的に、本当に健康にいいかどうかは分からないけれど、食費を浮かすためにフルーツグラノーラを、そして体の重さが取り去られることを期待して栄養ドリンクを購入した。

昼食のパスタは上出来だった。調子に乗って夕飯にカレイをバター焼きにする。これの出来が酷い。フライパンは焦げ付くし、切り身の原型を留めないボロボロの何かができあがった。こういう時は、認識を変えると良い。これは、こういう料理なのだ。ご飯に混ぜてちょっと醤油をたらしれば、なんとも美味しそうではないか。これをカレイライスと名付けよう。美味しくないと言いながらカレイライスを食べている子供たちを眺めながら、そういえば塩こしょうを入れていなかったことを思い出していた。とにかく夕飯だけが不安だ。平日、夕飯さえ効率よく用意できれば、育児と仕事との両立が成立する。そういえば、食材とレシピを毎日配達してくれるサービスがあった気がする。調べてみると、なかなかの値段だ。資本主義経済依存症であるミヤザキシンは資本がなければ生きていけないという妄想に取り憑かれているわけだが、実際のところ、ある程度の現状維持をしつつシングルファーザーになろうと思うとそれなりにコストがかかるのは間違いない。かと言って、根本から生活を変えるかどうかとなると、今はまだ判断すべきではないように思う。

寝る前に、気分転換として録画していた「Woman」というドラマを観た。過去7回分を観ないでいきなり第8回を観るので、まったく話が分からない。主人公はシングルマザーで母親との確執や難病を抱えているようだ。フィクションではあるが、これだけ不幸そうな人を見ると、自分はまだまだ大丈夫だと思える。そもそも、ある程度の現状維持を期待しているというのは、そうとうに余裕があるとも見てとれる。ミヤザキシンは余裕だ。心療内科でも飄飄としている、つまり俗世を超越していると診断されている。人生は偶然の積み重ねだ。現在から見ると過去の出来事はすべて必然だが、過去のある時点での出来事はすべて偶然である。それは、生命の進化とまったく同じだ。メガネと銀歯で身体機能を補助・増強しているサイボーグ化したミヤザキシンやと言えども、生命の法則にしたがって生きている。生物学的に考えれば、生きる意味などない。ホモ・サピエンスではなく人間として、自分で適当に生きる意味を取り繕えばよい。そのことを自覚しているだけで、強くはならないが、しなやかに生きられる。強ければ折れる、しなやかであれば受け流せる。ミヤザキシンはどんな生き方にでも対応できる。

2013年9月9日 月曜日

父親の願いはただひとつ。自分で自分を満たしてあげられる人間になって欲しい。満たされている人間は、他人にも優しくできる。そしてクリエイティブである。満足を知らない人間には、他人を満足させられる作品は作れない。三姉妹の父親のように。自らの生産物を一切受け入れられず、褒められてもすべてを否定する。常にこれでは駄目だと動き続ける。それは原動力ともなるけれど、満足する瞬間がなければクオリティの高いものは生み出せない。そして苦しみ続ける。苦は悪ではない。けれども、不要な苦しみ、他人を巻き添いにするそれは、避けるべきだ。どう育てれば、自分を満たせる人間に育つのかはわからない。ただ褒めるのとも違う。そもそも、親が何かしたところで、実は何も影響がないのではないかと考える。子供たちと一緒に遊ぼう。一緒に笑ったり、一緒に喜んだり。そういうことくらいしかできない気がしている。

月曜日。長女が目覚まし時計のベルだかiPhoneのアラームだかで目を覚ます。二女シオンは低身長で半年に1回のペースでこども病院に通院している。午後からは児童扶養手当の手続きがあったので、今日は自宅作業にすると同僚に前日にメールしている。経費削減のために自宅の固定電話とインターネットは解約した。その代わりに契約したPocket WiFi LTEのおかげで、どこにいても仕事のできるノマドワークが可能となっている。MacBook Airをバッグに押し込んで、シオンを連れてこども病院まで車を走らせる。この車も維持費削減のためもうじき手放すことにしている。不便になるが、家計と地球には優しい。

シオンは生まれつき体が小さく、標準児の適性身長から大きく外れている。それでも成長曲線は標準児のそれに準じているため、経過観察が続いている。この日も、身長と体重を測って、あとは簡単に聴診をして診察が終わる。いつもと違うのは、成長曲線の傾きがやや大きくなっていったことだ。少し、ほんの少しではあるが、標準の身長に近づいていた。シオンはたまたま低身長と診断されて経過観察を続けているが、三女サクも同年齢の子に比べるとかなり小さい。たまたま低身長の診断がないだけだ。ギリギリ戦後に生まれた両親の元で、昭和に育ったミヤザキシンヤば、とにかく牛乳を飲ませるだとか小魚を食べさせるだとか昭和的な対処法しか思い浮かばない。成長ホルモンまわりを調べればいいのかだろうか。父親は自分の身長の低さを棚にあげて、子供たちの身長のことを気にかけている。

保育園のルールで、その日の朝に知ったのだが、途中からの登園は認められていない。シオンは欠席させて、自宅で面倒を見ることにした。遊び相手の姉妹がいないと、ずいぶん退屈そうだ。彼女の母親にシオンを預けて、児童扶養手当の手続きをしに区役所を訪れる。ところが持参した戸籍謄本にはまだバツが付いていない。手続きができず、熊本の両親に戸籍謄本を、送ってもらうように依頼する。役所のシステムというのは驚くほど非効率だ。離婚というひとつのイベントに対して、どれだけ個人情報を手書きし、どれだけ部署を訪問しただろうか。と言いつつ、行政には大きな期待をしていない。とりあえず、もらえるものをもらうだけだ。もちろん、支払

うものはきちんと支払っている。

妻の買ってきた250円の弁当をションと分けあいながら食べる。自炊すると1食どれくらいのコストで作れるだろうか。実践しながらでないと分からない気がする。考えるのをやめて、頭を切り換える。ここからは仕事の時間だ。無線LANルータの電源をいれて、MacBookを開く。いきなり、いくつかのトラブルが目に入ってくる。ひとつづつ片付けよう。集中していると、もちろん平常時ほどの集中力は発揮できないが、いつの間にか時間が経っている。長女ヒマが帰ってきた。宿題を学校で終わらせてきたヒマは、ションと一緒に遊び始め、いつもと同じように喧嘩を始める。仕事のキリがいいところで、ヒマとションを連れて図書館へ向かう。ノマドワーカーなので、図書館でも仕事の続きができる。むしろ、カフェなどの雑音の中だと仕事がかどるのは何故なのだろうか。ところが、すっかり忘れていたが、月曜日は図書館の休館日であった。

まあ、そういうこともあるさと、そのまま小学校へ向かう。この程度のことで気を落としたりするのは無駄でしかない。気分転換のために子供たちと一緒に外に出るといった目的は達成しているのだ。ついでなので、小学校の片隅にある学童保育の施設で入所の手続きを済ます。友達と遊べるし、おやつも出るし、ヒマは大喜びだ。宿題の面倒も見てくれるらしい。しかし、そうなると学校と父親との接点がなくなってしまう。授業がどれくらい進んでいるのか、ヒマが授業の内容をどれくらい理解しているのか、定期的に確認するようにしよう。意図して行動しなければ、親は子供のことなど一切わからないものだ。書類の確認だけで手続きはすぐに終わり、明日から施設で見てもらえることが決まる。ただ、自動支払の申し込みに郵便局に行くようにだけ支持される。三女サクのお迎えまでは時間があるので、もと来た道を引き返し郵便局へ。郵便局へ到着したのは4時半。ところが窓口は4時までとなっている。残念ながら手続きはできない。まあ、そういうこともあるさ。この程度で気を落としても何のメリットもない。姉妹を敷地内の公園に残して帰宅すると、再びMacBookを広げた。

三女サクは保育園に姉がいなくても何の不安もなく過ごしていたようだ。荷物をまとめて、先生に挨拶をする。保育園生活2週目、まだ上手に挨拶ができていない。慣れるにはもう少し時間が必要そうに思える。それでも、友達と手をつないで、正確に言うと友達に手を引かれて、遊具の方へ走って行く。大丈夫、問題ない。買ったばかりの自転車にはまだ子供用シートを取り付けていない。サクをサドルに座らせて、父親はその後ろの荷台に座る。警察官舎を横目に見ながら、二人乗りで家路をゆく。後ろめたさは感じるが、今はそれどころではない。帰宅すると、妻の引っ越しの準備が佳境を迎えているのだった。とりあえず引っ越しの準備を手伝っている振りをして、ヒマが図工の授業で使う素材が足りないことが発覚した。まもなく夜8時。店によっては閉店する時刻だ。車を飛ばして、飛ばすというほどスピードを出さないよう意識していたが、ダイソーに到着した。ビーズや色紙など、やや多めに購入する。みじめな思いをさせたくないという、資本主義だとか所有だとかに囚われた自分勝手な思いにかられて商品をカゴに入れていく。子供が求めているのは物質的な豊かさではないはずだ。それでも、買わずにはいられなかった

。

妻が用意した最後の食事は、たまごかけご飯だった。結婚して最初に作った料理が、ウインナーを焼いたものにレタスを添えただけのもので、最後の晩餐がたまごかけご飯というのもブレがなくて素敵に思える。あいかわらず、子供たちに理不尽な怒声を浴びせながら、入浴を済ませて寝かしつける。ここからはまた引っ越しの準備に追われる時間帯となる。生活必需品まで持ち出そうとするのはどうかと思ったが、妻には妻の、夫には夫の正義がある。ミヤザキシンはものの善悪が分からなくなっていた。同じ空間であっても、視点が違えば異なる空間として認識される。人によって違った世界が広がっている。どれが正しいというものでもない。すべて正しい。ミヤザキシンは世界をそのように解釈しているが、それすらもひとつの解釈でしかないことに気づいている。他人に強要することはできないのだ。各々の世界と世界とのインターフェイスは、どれだけ多様性を許容するかによってその柔軟性が変化する。許容に許容を重ねた、少なくとも本人はそう認識している、その結果が引っ越しの準備として目の前に繰り広げられている。だからこそ、後悔も未練もない。夫婦だった二人は、またお互いの世界の境界線を明確にしてゆく。

三姉妹の母親が引っ越して行った。悲壮感や喪失感などはない。かつて妻だった、そして母親だった人間が、この家からいなくなるという事実だけがあった。下2人を保育園に連れて行くとき、引っ越し屋とすれ違って挨拶する。ふと振り返る。彼らは今すれ違った人物が、彼らがこれから作業する部屋の住人だとは気づかなかっただろう。同じ部屋に暮らしながら、すでに別々の人生を歩んでいるのだ。保育園に向かう。二女シヨンと三女サクも、母親の引っ越しのことは知っている。しかし、いつもと様子が違うところはひとつもない。母親の存在とはいったい何だったのだろうか。2人を保育園に送り届けて、自宅に荷物を取りに戻る。まだ作業中だった。見届けることなく、これから新居で生活する元妻に激励の声をかけて家を出る。

オフィスにはあいかわらず対処すべき不具合が待っていて、新規開発をするだけのエネルギーが溜まっていないミヤザキシンは、ひとつずつ不具合に対処していく。嫌ならやめればいい。誰かのツイートが目に入る。誰に向けられたものかはわからないが、ミヤザキシンは首を振った。ただ嫌なことをしているわけではない。誰もが喜んでこの苦しい状況を引き受けるとは思えないが、少なくとも自分は自己責任でやっている。成功するも失敗するも自分次第。成功と失敗は明確に定義していないが、ギブアップすれば失敗が確定するのは分かっている。だが、失敗のことはどうでもいい。実績が欲しい。友人からストイックだと評され、自分自身そしてその生産物にまったく満足できないミヤザキシンが誇れるような実績が欲しい。それが、これまで関わってきたすべての人への恩返しになる。そんな気がしている。栄養ドリンクを飲み、一時的に絶不調から普通の不調くらいに回復する。スッキリしない頭で、それでもひとつずつ問題を片付けていく。

時間は限られている。保育園のお迎えと、夕飯の準備をしなければならない。学童保育から帰宅した小学2年生ヒマがひとりで留守番する予定になっている。シングルファーザー初日ということで、やや早めの4時にオフィスを後にする。この時間だとヒマもまだ帰ってきていない。車を走らせ、イオンに食料品を買い出しに行く。冷蔵庫にあった食材で今日の夕飯をまかない、明日のためにカレーを準備しておこう。明らかにカレーの材料とわかる野菜の組み合わせをカゴに入れて、レジに並ぶ。午後5時、レジには長蛇の列ができています。できるだけ時間を効率よく使う必要のあるミヤザキシンには、この時間は買い物に適していないように思える。帰宅中に、ヒマからLINEのメッセージが届く。いまかえったよ、と。家に帰ったらメッセージを送れという指示をきちんと遂行している。今後は、0円で契約したiPhoneが家で留守番をするヒマを見守ってくれるはずだ。

保育園には申請を出していないので車で迎えに行くことはできない。自転車に乗り換える。ヒマも行きたい言うので、連れて行く。こどもの望みは、たとえ大人が聞いて馬鹿げたことのように思えても、できるだけ叶えようと考えている。大人には理解できない世界があるのだ。5時半過ぎ

に保育園に到着する。6時までは園庭で遊ばせることができるので、しばらく遊ばせておく。できるだけストレス発散して帰ってきて欲しいとは、どの親も抱える願いだろう。夕飯の支度が手つかずなので、6時を待たずに保育園を後にする。家に帰ってひと息つくと、ずいぶん家が広がっている。大人1人分の生活用品はこれほど多かったのか。これまで何度か引っ越しを繰り返してきたが、空っぽの部屋を見るとなんだか切なさを感じるものだ。しかし、今日の前のところどころ空っぽになった部屋を見ても、何の感情も湧いてこない。スッキリしたな、とだけ思った。次に、この家の広さは不要かもしれない、もっと狭い家に引っ越そうかと思った。住宅手当が出るという前提で借りた物件だけに、いざ手当がでないと家賃が生活費を圧迫している。それでも、いまは引っ越しをする余裕などないのだけれど。

冷蔵庫に残っていた肉と、買ってきた野菜を炒める。これなら包丁とコンロが使えれば何とかなる。野菜炒めが完成。朝から予約しておいたご飯が炊けている。このまま夕飯の時間にしてもいいが、流れで明日のカレーを作っておくことにした。その間に三姉妹にシャワーを浴びさせる。子供たちのだけだとうまく体を洗えないが、今は細かいことを気にしている場合ではない。シングルファーザーへの負担を減らすこと。それが最優先だ。風呂から出てきてパジャマを来た三姉妹を使って、食事の準備をする。野菜炒めに焼肉のタレをかけて、ちょっとかけすぎた、今は気にしない。肉と一緒に冷蔵庫に残っていた納豆も食卓に並べる。ちょうどカレーもできあがる。これで明日は時間稼ぎができる。

夕飯を食べていると、妻が最後の荷物を取りに戻ってくる。新居ではまだ風呂に入れないので、シャワーを貸して欲しいと言う。シャワーを貸すと、自主的に家事を手伝ってくれる。母親の登場で、三姉妹は想定していたよりも早くベッドに入ることになる。ベッドに入っただけで、おとなしく寝るという保証はないけれど。物音を立てぬよう元夫婦は家を抜け出し、最後の荷物を車に載せる。元妻だった三姉妹の母親を載せて、彼女の新居まで夜道を運転する。助手席にちらりと目をやり、この女はいったい何者なのだと、ミヤザキシンヤは誰にともなく問う。駐車場と新居を2往復して荷物を運び入れ、ついでに浄水器を取り付ける。子供たちの工作に使おうと不要になったダンボール箱を4つもらい、じゃあ元気で、とだけ声をかけて家路につく。帰り際に、ありがとうと言う声が聞こえて来たが、それはたんに荷物を運んだことに対する礼であったように感じる。

家に帰ると、子供たちがまだ騒いでいる。迷ったが、声を荒げるという選択をする。その必要はまったくないにもかかわらず。洗濯物を干すと、自由時間が訪れる。しかし、疲労が溜まっているのか、意識レベルが低下している。本を開いても字面を目で追うだけで、内容がまったく入ってこない。しばらくボーッとしていたが、12時になったところで寝ることにした。さすがに子供たちも寝付いている。その寝息を聞きながら、声を荒げるという選択をしたことを後悔する。

遠くでiPhoneのアラームが鳴っているのが聞こえる。伸ばした手がiPhoneに触れる。それでもアラームは遠くに感じる。一瞬、記憶が途切れる。ハッとして目を開ける。iPhoneは手元にある。ホームボタンを押す。8時。寝坊だ。飛び起きると、保育園組を叩き起こす。小学校に登校しようとしていた長女ヒマに、明日から7時には起こして欲しいという希望を伝え、送り出す。次女シヨンと三女サクは、前日遅くまで騒いでいたので、目覚めが悪い。2人を起こしながら、3人分の食パンを焼きつつ、弁当箱にご飯を詰める。しなくていいマルチタスクはすべきでないと考えているが、遅刻を回避するためにはマルチタスクせざるをえない。あまちゃんは見れないので、昼の再放送を録画予約する。3人で食パンを食べるのだが、幼児に時間なんて関係ない。いつもとかわらず遊びながら食べている。子供にとっては食パンを食べるのも遊びだから、明らかにマナー違反の場合以外は叱るようなことはしない。ただ、今朝は時間がない。手が止まっていると、急かして食を進めるよう促す。ミヤザキシンヤは時間に追われるのが嫌いだ。だから、待ち合わせの1時間前から約束の場所でスタンバイしているという時期もあった。新卒で入社した会社でも始業1時間前に出社して、誰もいない社内で自分の世界に浸っていた。今は、昼食の時間を意図的にズラしている。時間になったから食事を摂るといのはおかしい。腹が減ったから食べるというのが、ホモ・サピエンスとして本来あるべき姿だと思う。昼休みという他人が決めた不特定多数のための時間に囚われたくない。特定の、自分の、生理状態にあわせて食事を摂るべきだ。とは言っても、現代社会依存症であるミヤザキシンヤは、遅刻をしないように、子供たちを急かしてすみやかに保育園の準備がなされるよう手配するのだった。

なんとかいつも通りの時間に保育園に送り届ける。庭園では園児たちが遊具で遊んでいて、しかも面白そうな遊具がたくさんある、普段は柵の中にいるヤギも外に出て園児たちと触れ合っている。1年中温水プールに入れるし、おやつも充実している。子供たちはさぞ満足しているだろうという、父親の自己満足は心の支えになっている。子どもたちに幼稚園の方が良かったと言われると、ただ謝るしかなくなるだろう。先生とまだぎこちない朝のご挨拶を済ませ、向こうへ走ってゆく姉妹。ミヤザキシンヤもこの時間は顔の筋肉が緩んでいるような気がする。それもつかの間、足早に地下鉄へ向かう。今日は社長が、昨日から心の中では船長（キャプテン）と呼んでいるが、が福岡オフィスにやってくる。今後の方針を話し合わなければ。

キャプテンに会社としての新たな動きを聞き、次に自分の描いているプランを説明する。方向性は一致する。収益を上げるためには妥当なプランだ。ミヤザキシンヤの中のエコノミック・アニマルがもっと急激な成長を求めている。もっとも自分の中のアニマルではないその他大部分は、成長とは何か、本当に成長が必要か、判断できずにいるのだけれど。シングルファーザーになった件に関しては、オフィスでの滞在時間は気にしなくていいと言われた。だからこそ、「ONE PIECE」に例えて船長（キャプテン）と呼んでいる。口には出さないが。心配ばかりかけて申し訳ない。

昼は食費削減のためにフルーツグラノーラと低脂肪乳を買っていたのだけど、2日連続でステーキ重を食べることになった。1食で家族4人の外食費に相当する。チラつく三姉妹の顔を振り払って、肉を喰らう。元気を取り戻さないと、生き抜くスタミナを付けないと。そう言い訳しながら。昨夜発表されたiPhoneの新モデルの話題に相槌を打ちつつ、型落ちしたてのiPhoneでクックパッドのアプリから明日の夕飯のレシピを探す。もちろんクックパッドのアプリのユーザーインターフェイスの研究も合わせて行っていた。

夕方になると、極度の披露と強烈な睡魔が襲ってきた。最近、これが多い。睡眠はなんとか足りているはずだ。心療内科で処方される薬の量は変わっていない。ただ、ダメージを追っている時には薬の副作用が出やすいのかなという気もする。次回通院した時に相談してみよう。立ち上がってウロウロするが、意識レベルは低下するばかりだ。そもそも、立っているのがつらい。横になりたいが、持ち前の我慢強さ、それはたいていの場合は短所として認識している、が邪魔をする。学生時代から、どんなに体調が悪くなくても最後まで授業を受ける人間だった。結婚生活も我慢の極みだったし、仕事がうまく行かなくて我慢の時期を過ごしてきた。親からも、そんなに我慢するなと言われている。何がミヤザキシンヤに我慢を強いるのだろうか。苦しんでいると、保育園のお迎えの時間となる。重たい体を引きずりながら、地下鉄の駅まで歩く。

昨夜、カレーを作り置きしているし、朝からご飯を予約炊飯しているので、夕飯の準備はできている。地下鉄を降り、ベンチで一息つくと、そのまま保育園に向かう。迎えにくるのが早すぎると憤慨している娘たちを、しばらく園庭で遊ばせる。ここで十分に疲れて、夜はおとなしく寝てくれ。6時には園庭が閉鎖される。家路をゆきながら、曲がり角や横断歩道でまわりの見えていない姉妹に声を掛ける。まだ子供たちだけで外を歩かせるのは危ないように感じる。家では先に帰っていた長女ヒマが宿題を終わらせてマンガを読んでいる。マンガの是非はよく分からないが、活字に触れるのは悪くない気がする。しかも、名探偵コナンなので、フグの毒はテトロドトキシンなど人生に一度は役に立ちそうな知識が身について良いかもしれない。小学生の頃大好きだったズッコケ三人組シリーズを買ってあげたいが、まだ早いだろうか。とりあえず、動植物の図鑑は早めに手に入れたい。

甘口のカレーにカボチャを投入した激甘のカレーを、おいしくないと食べる三姉妹。大丈夫。これからはクックパッドがついている。いろいろ作ってみよう。女の子特有なのだろうか、食べるよりもしゃべる方に口が占有されている。保育園のお友達の名前がポンポン出てくるが、とても覚えきれない。子供の話は遮らないと決めている。が、案の定、おしゃべりに占有された口では食が進まず、カレーライスを残すことになる。ラップをして保管する。明日の朝には責任を持って食べてもらおう。エコロジカル・フットプリントを小さくするため、食料は無駄にしない。とは言え、大量生産大量消費の食品を買っているのは良くないなと反省する。#heymeotoの二人が、エンゲル係数が高い方が幸せだという趣旨の発言をしていたと記憶しているが、そこを目指す

のが正解な気がしている。もちろん、正解など存在しないので、あくまでミヤザキシンヤが正解だと認識しているという話だ。

寝ない。保育園組はあいかわらず、寝ない。保育園は幼稚園と違って昼寝の時間がある。しかし2人は昼寝を必要としていない。その結果、家でベッドに入っても寝ないという結果をもたらしている。まあ、眠くなれば寝るだろうと、放置したまま家事をしているのだが、騒ぎ声が聞こえるとうとうと気になってしまう。考える。自分へのストレスはできる限り軽減せねばならない。姉妹が寝つくまで一緒に横になってみようか。自分がそのまま寝てしまうリスクはあるが、試してみる価値はありそうだ。ミヤザキシンヤは遊ばない。いつも何とか前に進もうともがいている。子供たちと過ごす寝る前のひとときくらい、頭を空っぽにして楽しく過ごしてもいいのかもしれない。

7時。子供の頃から起きる時間はたいてい7時だった。社会に出て、まあよくあるビジネス書の影響で早朝5時に起きていた時期もあった。しかし、今は睡眠時間を少しでも確保したい。1日乗り切るだけのエネルギーを充電したい。寝過ぎると逆効果だとも言うので、4人家族の生活が落ち着いてきたら最適な睡眠時間を探してみよう。7時ではすぐに保育園組を起こさなければならないので、家事や自分のことをやる時間が取れない。小学2年生ヒマは朝はまったく手のかからない子で、自分で起きてパンを焼いて食べると学校に行ってしまう。最近は5時ごろには起きだしてマンガを読んでいるようだ。次女シオンも姉の影響だろうか、暇さえあればマンガを読んでいる。少女マンガは妻が全部持って行ってしまった。子供たちは「ドラゴンボール」や「名探偵コナン」を読んでいる。次はどう進もうか。手塚治虫あたりを買ってきたら読むのだろうか。それから、21世紀を生きる者として「ONE PIECE」は外せないだろう。

ヒマが学校に行く。「あまちゃん」が始まるまでに保育園組の支度を済ませる。朝食は昨日のカレーの残りだ。母親がいなくなって食卓が賑やかになった。叱る人間がいないので、おしゃべりをしながら夕飯を食べる。その分、食べるペースが遅くなり、食べる量が少なくなり、残り物が翌日の朝食になるというシステムとなっている。これまでが食べ過ぎじゃないかと心配していたところなので、これくらいがちょうどいいかなと思う。「あまちゃん」が始まる。震災後の東北の様子を描いている。実際のところ福岡にいと、2011年当時でさえも、震災も原発もどこか遠いところの話のように感じていた。東京から来客があった時に話をするくらいで、福岡人どうしでは震災や原発が話題になることは少ない。もちろん、それが福岡の大多数がそうだというわけではなく、ミヤザキシンの半径100メートル圏内の観測結果でしかないけれど。震災直後、ブログやFacebookページなどのメディアで情報発信していたミヤザキシンは、どうしていいかわからずメディアの更新をほぼストップしてしまう。ただ海外の方からの祈りのメッセージや、米軍や自衛隊の活動の様子、復興の兆しなどポジティブなネタを集めて細々とFacebookページに流していた覚えがある。それから数ヶ月も経たないうちに、いつもと変わらない生活をしているのだから、自分の無関心さだか人間の適応能力だかに驚くとともに何だか残念な気持ちになる。我が家の育児についても、半径3メートル圏内にいながら、自分ごととして捉えてることができていなかったんじゃないか。ここ数日1人で三姉妹を相手にしながら、そんなことを考えることもある。

人生は自転車に乗っているようなものだ。こぎ始めが一番大変だし、いったん進みだすと楽に進むことができる。スピードが落ちてくればふらついて、止まれば倒れる。保育園も2週目の後半、力を入れてこがなくても進んでいる。保育園から自転車に乗って、これは本物の自転車の話だ、家の前まで移動する。このアパートには駐輪場がない。階段の脇に自転車を停めて、歩いて地下鉄の駅へ移動する。入社時刻が遅くなったので、超満員電車で押し潰されそうになることがなくなった。車両によってはちらほら空席もある。いつも通りの重たい体を座席に沈める。最

近は、iPhoneで日記を書いていることが多い。前日の日記を翌日の朝に書く。これまでは前日のことを思い出すことなどなかったし、思い出すほどの1日でもなかった。一生というのは1日の積み重ねだから、思い出す価値の無い1日を積み重ねることは、価値の無い一生を作り出していく気がする。そうは言っても、ハレとケ、毎日がハレではない。毎日新しいことにチャレンジしようと気合を入れると、今は折れる。そうではなくて、一見無価値に思える1日でも思いだしてみると価値が見つかるんじゃないか、価値の無い1日なんてないんじゃないか、そんな思いで前日の日記を書いている。完全に後付けだけれど。

オフィスでは、開発の手を止めて、画面表示の高速化に取り組む。正直に言うと、バリバリ開発するほどのエネルギーが今はない。そもそも、仕事自体、いったん休んだほうがいいのではないかとさえ考えたりもする。しかし、自転車に乗って人生を走っている。止まれば倒れる。また進み始めるにはより大きな力が必要になる。ゆっくりでもいいから進み続けることが大切なのだと思う。もう何年も前になるが、資格コレクターをやっていた時期がある。開発系のベンダー試験や高度情報処理試験から、簿記やファイナンシャル・プランナーまで、履歴書の資格欄に収まりきれないほどの資格を取得していた。当然、勉強法についての研究も怠らなかった。そのなかに、どうしてもやる気が出ない時はどうするか、という課題がある。そんな時に、気合を入れていつも通りやろうというのは無理な話だ。どうしてもできないときには、いつもの10分の1の分量をやるだけでもいいし、それもダメならテキストを目で追うだけでも構わない。要は、完全に足を止めてしまわないこと。それが勉強のコツで、今やっているWebサービスの開発についても同じことが言えると考えている。今はどうしてもエネルギーが足りない。そこで、数字を見ながら淡々と進められる画面表示の高速化に取り組みことを決めた。どうしても新機能を付けて目を引きたくなくなってしまおうけれど、高速化だってユーザーにとっては大きな価値となるはずだ。

早めにオフィスを出て、ダイソーに向かう。妻が持って行ってしまった調理器具と、ヒマにキッチンタイマーを買う。キッチンタイマーも勉強には重要なアイテムだ。学校からのお知らせでも30分間机に向かう練習をするよう指示されている。キッチンタイマーを使うと、ゲーム感覚で練習できるだろう。帰宅すると、妻がいた痕跡がある。電話で、勝手に家に入るのはやめて欲しいとだけ伝える。母親のいない新しい生活を築こうとしている。今はそこに踏み込んで欲しくない。保育園のお迎えに行くと、いつもと同じようにみんなでNHKのアニメを観ている。時間的にはまだ始まったばかりだ。案の定、迎えに来るのが早すぎると文句を言われる。代わりに園庭で遊ばせてから帰宅する。家には昨日のカレーが残っている。今日は不慣れな料理は必要ない。三姉妹に先にシャワーを浴びておくように言うと、これまた妻が持って行ったテーブルを求めてホームセンターまで車を走らせる。手頃なテーブルが見つからず手ぶらで家に帰る。三姉妹はまだシャワーを浴びていない。やはり、子供だけで留守番中にミッションを課すのは難しい。再度、シャワーを浴びるように言って、夕飯の支度をする。これまたこれまた妻が持って行ったレンジの代わりにリサイクルショップで格安で買ったレンジは温度調節が難しい。素手で持てないほど加熱された皿をタオル越しに掴んで食卓に並べる。昨日より美味しいと言いながら食べる

子供たち。さすが2日目のカレーだ。

夜。子供たちが寝ないのは想定済みなので、対策を立てている。三姉妹の就寝時刻よりも前にある程度の家事を済ませておく。三姉妹が寝室に向かったら、父親も布団に横になる。パパの子供の頃の話をしてあげよう。何の話が聞きたいかな。子供たちのリクエストに応じて、怖くてトイレにいけなかった話だとか、毛虫に刺された話だとかを静かに語る。暗い部屋の中でも子供たちの目が輝くのがわかる。テンションが上がってきている。あれ、ドラマなんかだと、このまま寝てくれる流れなのだけど。現実にはドラマのように行かないことを学習して、それでも子供たちを寝かしつけながら自分が寝てしまうというドラマさながらの展開を経て、気づくと1時間半も経っている。これはかなり時間効率が悪い。明日からは別の手を考えなければ。それでも、自分の話子供たちが目を輝かせていたのが何だか楽しくて、毎日こんな感じでもいいかなと思ったりもする。

2013年9月13日 金曜日

13日の金曜日。仏滅。その組み合わせに何の意味もないことは知っている。厄はカレンダーを読まない。ある日突然やってくるものだとも限らない。時間をかけて忍び寄ってくる。それはたいがい、人間の無自覚、無関心、無視の積み重ねによって近づいてくる。Xデーが来た時には、取り返しがつかなくなってくる。父親は三姉妹との日々に負の資産が蓄積していないことを確認しながら生きている。

朝食は昨日と同じく、残り物のカレーだ。食べ物を捨てることに最大級の罪の意識を感じる。その罪の意識を他人に押し付けることが正しいことなのかは分からないけれど、三姉妹には自分が残した食べ物は自分で処理してもらうことにする。ひとくちカレーを口に運ぶ子。また美味しくないとっている。残念だが諦めてもらおう。次は、納豆を入れたかと聞いてくる。入れるはずがない。いや、カレーに納豆をトッピングするというオプションは知っている。だが、我が家ではそのオプションは用意していない。子供たちのカレーをスプーンで持ち上げる。糸を引いている。罪の意識に苛まれながら、次々とカレーを捨てていく。許し難い罪を犯してしまった。

気を取り直して、保育園に行く。ションとサクがスモックを忘れたと申告したのは、保育園に到着した瞬間だった。敷地内に2人を残して、自転車を飛ばす。自宅と保育園の間を余分に1往復して、ようやくスタートラインに立つ。3階のサクの教室まで駆け上がり、すれ違うお母さんたちに挨拶をしながら、1階のションの教室でも朝のルーチンワークを行う。姉妹を先生に引き渡し、保育園を後にする。体が重たい。1往復分を差し引いても、いつも以上に調子が悪い。地下鉄に乗り込むと、迷うことなく優先席を目指す。立っていれば倒れるだろうという予感がしていた。

何とかオフィスにたどり着くが、そのままソファに倒れこむ。後ほど来客があることを告げるシェアオフィスの入居人に返事をした直後、ミヤザキシンの全機能は停止した。スリープ状態から復帰すると、ある程度バッテリーは充電されているようだった。フラつきながらデスクに向かう。今日も地道に画面の高速化に取り掛かることにする。派手な開発はまだ重い。キーボードをカタカタやっていると、すぐに昼がやってきた。午後からは小学校の授業参観と懇談会に行かねばならない。食欲はそれほどないが、食費削減のために用意しておいたフルーツグラノーラを食べる。以前からの知人が訪問してきて、フルーツグラノーラにツッコミを入れる。健康にいいのか悪いのか分からないと笑いあう。ゆっくり話をする時間もなく、オフィスを後にする。倒れそうなほどの疲労は回復していて、それでもいつも通りの重たい体を引きずって地下鉄に乗り込む。乗り込んだ車両の終点は、目的地のひとつ前の駅だった。ここまでくると13日の金曜日の仏滅の何だかんだと考えそうだが、ミヤザキシンはそんな偶然でも何でもないただの周期に意味を見出すことはないのだった。しかし、厄はまだ続く。あわてて出てきたので、昼食後に飲むべき薬を飲み忘れている。さらに良くないことに、今朝は朝食後の薬も飲んでいない。区役所に児童扶養手当の手続きに行くが、脳内で不快感の塊が大きくなってゆく。薬の血中濃度が下が

って、離脱症状が始まっているのだろう。塊に圧迫されて軽い頭痛が始まる。このままでは頭が働かなくなり、体も怠くなって身動きが取れなくなる。区役所のカウンターに座って、手続きが早く終わることだけを祈っていた。

2年生の2学期にしてはじめての授業参観。もちろん、ほとんどは母親が来ている。教室の後ろに立っていると、振り返ったヒマと目が合う。にっこり微笑む。まだ気恥ずかしいとかそういう年頃ではないのだ、ということに少し驚く。授業が始まり、子供たちが前に出て自分が欲しい誰かを助けるためのアイテムを発表していく。ドラえもののひみつ道具みたいなものだ。我が子の番が来て、開くと雨が止む魔法の傘を発表する。既成観念に囚われない自由な発想に満足しつつ、人前ではボソボソしているヒマが、若干小さな声ではあったが、はっきりとした声で前を向いて発表する姿にひと安心する。授業が終わり、ヒマが抱きついてくる。人目をはばからずに甘えてくる年頃。家で長女として振る舞う姿と違う、同級生の中でひときわ小さく見える体で甘えてくる姿に、まだまだ幼さを感じざる。

親が幸せな顔をしているのが、子供には一番の幸せなんです。授業参観の後の懇談会での担任の先生の言葉。お母さんたちに混じって参加した懇談会は、前半はやや退屈に感じられた。各委員会からの報告と行事予定について。後半は家庭学習についてグループディスカッションが行われる。テーマは家庭学習。他の家庭の状況を聞いてみると、どこも同じような状況なのだと感じる。国民総中流家庭国家の一員であるミヤザキシヤは、他人と同じだという事実で安心感を感じる。しかし、子供たちはこのままではいけないだろう。どのような家庭教育が必要だろうか。最後の先生のまとめが素晴らしい。体験学習が重要なのだという。風を切って走ったことのない子は、風を切って走るということが分からない。身を切るような冷たさを体験したことがなければ、身を切るような冷たさが分からない。勉強ではないのだ。体験することで学習するのだ。そして、冒頭の言葉。海で泳いだことよりも、バーベキューを食べたことよりも、親が幸せな顔をしているのが、子供には一番の幸せなんです。それを聞いて考える。父親は普段幸せな顔をしているだろうか。明日からは三連休だ。仕事の遅れを取り戻したいが、子供たちと一緒に過ごしたい、一緒に笑いながら過ごしたいと心の底から願った。

焼き魚なんて初めてだ。ただ魚の切り身を焼けばいいだろうと、鮭の切り身を買ってくる。ド素人でも様々な料理ができる魔法のフライパンを使って焼くと、いい具合に焼きあがる。大根をすりおろして、三姉妹の好きな梅干しも食卓に並べる。どうだろう。それなりに充実した食卓に見えるではないか。夕飯の支度をしていると、知り合いのシングルマザーからFacebookのメッセージが届く。離婚を祝福してくれるのは坂口恭平以来2人目だ。パパが幸せだと子供も幸せになると思う、と担任の先生の話とのシンクロニティを感じるメッセージをもらった。バタバタしていたので返事もまともに返せないが、自分の選択を肯定してもらおうとうことに感謝する。食卓では、梅干しの効果は絶大で、今日は美味しくないという声は聞こえてこない。夕飯の準備をしている間に子供たちだけで風呂に入れている。最近はこれが日常のパターンとなっている。食

事が終われば歯を磨いて寝るだけだ。もちろん、いつも通りおとなしくは寝てくれないだろうとことは覚悟している。三姉妹とともに寝室に行き、昨日と同じように、せがまれるがままに子供のころの話をする。暗い部屋の中でも子供たちの目が輝くのが分かる。それが楽しい。相変わらず姉妹で喧嘩をしているが、しだいにおとなしくなってきた、これならそっと抜けだして洗濯ができそうだ。洗濯物を干し終える頃には、三姉妹はすっかり眠りにについている。

部屋には書類が山積みだし、仕事の遅れも気になっている。しかし、調子はすぐれない。気分をリフレッシュさせようと、iPadで映画を観る。ナタリー・ポートマン主演、ガイ・フォークスの仮面の男が登場するあの映画だ。革命について考えながら、寝室に向かう。今は自分たちの生活で精一杯だ。社会との関わり、社会への働きかけがまるで足りていない。自分のことではなく、社会のことを考えて生活できるように、しかし今は焦らず目の前のことをひとつづつ片付けていこうと考える。

休日ということにする。運動会シーズンが終わったら、土曜日も保育園と学童保育に子供たちを預けることになるかもしれない。昨日の小学校の懇談会で担任の先生に言われたことを思い出し、楽しく遊んだ幸せな思いでを作ろうと目論んでいる。まずは、朝食にホットケーキを焼く。昨日から宣言していたので、三姉妹が楽しみにしている。ホットケーキミックス200g。計ろうとして秤がないことに気づく。母親が秤を持って行ったため、ホットケーキを作れないことを三姉妹に告げる。ブーイングを受ける父親。イチゴが練り込んであるパンがあったので、なんとかそれで身を守る。明日こそはホットケーキを焼かなければ。朝食を済ませると三姉妹にテレビの視聴と引き換えに留守番を頼み、ひとりで買い物に出かける。夫婦関係とともに失われた秤とテーブルを買いに。高いかと思っていた秤は600円ほどで購入できた。しかし1,000円もあれば帰るだろうと考えていたテーブルには3,000円を費やしてしまう。これならDIYでテーブルを作ったほうが安くて楽しめただろう、と帰りの車の中で少しだけ後悔する。

内弁慶の外地蔵を体現する三姉妹が留守番している家のドアを開けるのには勇気がいる。家の中が荒らされてはいないか、誰か泣いてはいないか、覚悟をしていれば精神的ダメージは軽減できる。家に入ると、思いのほかおとなしく遊んでいる。もっとも、三姉妹の母親であれば怒鳴り出すであろう状態ではあったのだけれど。父親は細かいことは気にしない。気にならない気質というわけではない。意図して気にしないようにしている。細かいことを気にしていると、きっと三姉妹のシングルファーザーはやっていけないだろう。散らかった部屋を片付けさせ、家中に掃除機をかける。とりあえず床は綺麗になった。トイレだとか水回りだとか、これまで関与していなかったところを掃除するノウハウはがない。小学生の頃に学校のトイレ掃除をしていたのを思い出す。今にして思えば、あれでは綺麗にならなかつただろう。テレビでCMをしている除菌清掃系のあの凄そうなスプレーなどを使うと良いのだろうか。テレビをほとんど観ない生活を送り、必要な情報はネットですべて手に入ると考えている、そういう意味でのネット依存症であるミヤザキシヤがテレビCMに多大なる影響を受けているという事実になんだか可笑しさを感じる。

昼前に天神に移動する。仕事をするのも天神なら、遊ぶのも天神だ。ミヤザキシヤが好きな街。今日は富士フィルムがやっている30,000人の写真展が開催されている。この写真展を見に行くのが毎年恒例の行事だ。出かける前に長女ヒマに安いデジカメを渡しておいた。好きなように使っていいよと。子供の撮った写真を後から見てみるのは面白い。被写体もアングルも大人のそれとはまったく違って、子供の見ている世界を垣間見ることができる。写真展の会場でも、適当にパチパチ撮っている。応募者全員の作品が掲載されるという写真展には、たくさんの写真が掲載されている。写真で覆われた壁の間を歩く。上級者のコンテストではないからクオリティはまちまちなんだけど、どの写真が素晴らしいという上下関係は存在しない。そこにあるのは単に紙に印刷された写真ではなくて、撮影者や被写体が生きている世界を覗く窓になっている。2次元の写真の向こうに、3次元、それに時間を加えた4次元の世界が広がっている。あっ、とヒマが声

をあげる。視線の先には、三女サクが母親の作ったバースデーケーキの口ウソクを吹き消そうとしている写真がある。誰にも言わずにこっそりと応募していた写真だ。この写真を撮った時には、現在のこの状態が訪れることは確定していなかった。確定はしていなかったが、選択肢のひとつとしては考えていた。写真は真実を語らない。その写真には不穏な空気など微塵も写っていないのだから。ただ幸せな瞬間だけが写っている。

三姉妹は天神にあるオフィスが好きだ。数回しか訪れたことがないのに、案内されずとも自力でたどり着くことができる。シェアオフィスになっていて、面白いお兄さんがいたり、玩具が転がっていたりする。今日は誰もいなかったが、Apple TVでポケモンを流してやると喜んで観ている。ミヤザキシンヤは自分の席に着く。フリーアドレス制なので本来は自分の席というのはないのだが、iMacを据置きしているため事実上そこがミヤザキシンヤの席になっている。昨日のことを思い出しながら日記を書く。日記を書くことと心の安静の関係性はよくわからないけれど、少なくとも何らかのプラスの効果を得ている感覚がある。人生には大切じゃない日なんて存在しない。幸せな出来事がまったくない日なんて存在しない。ただ、それを確認したいだけなのかもしれない。

ポケモンを3話分で打ち切ると、オフィスを後にする。ブックオフに行ってマンガを仕入れた後、ビックカメラに中古のiPadを見に行く。明後日は敬老の日だ。三姉妹の祖父母にiPadをプレゼントしたい。その裏には、FaceTimeを使ってビデオチャットができれば三姉妹が喜ぶだろうという目論見がある。出費がかさんでいる。できれば安く済ませたい。ところが、中古も新品もそれほど価格が変わらないようだ。迷った末、新品のiPad miniを2台購入する。父方の祖父母は使いこなせるだろうか。母方の祖父母は受け取ってくれるだろうか。今回の騒動で心配をかけた両家へのお詫びの品でもある。ミヤザキシンヤの母親は息子に、心配かけまいとするな、親に気を使うな、と何かにつけて言っている。子供たちが喜ぶからという理由でプレゼントしなければならぬまい。三姉妹の母親の両親には、どうやって渡そう。まず、どういう名目で訪問べきかが分からない。夫婦の縁が切れても、親子の縁は切れないし、祖父母と孫との縁も切れない。というのは、ミヤザキシンヤがそう認識しているだけで、ご両親がどう考えているかは分からない。こういう時は、何も考えずに感情だけで動く人間になりたいと思ったりもする。

帰宅する頃には疲労がピークを迎えていた。子供たちがポケモンを観ている間に仮眠をとったにもかかわらず。調理不要なししゃものみりん干しと納豆を食卓に並べる。ご飯も朝から予約炊飯しておいてよかった。自分の分の食事を済ませると、まだ食べている子供たちを放置して倒れ込んでしまう。目を覚ますのにそれほど長い時間はかからなかったが、放置しておくには三姉妹はまだ幼すぎる。食事の前に入浴済みの子供たちに歯磨きをさせると、少し遊ばせて寝室に送り込む。自分は風呂には入らないことを決めて、洗濯も明日に先延ばしする。体調は回復していないが、目は冴えている。「解夏」という映画を観る。主人公は次第に視力を失っていく。飄飄としているミヤザキシンヤは、きっと視力を失っても飄飄と生きていくのだろうという気がする。

強くない。しなやかさで乗り越える。それが、今の生活を支えている。

約束のホットケーキを。秤がなかったため昨日は諦めたホットケーキだが、その後すぐに秤を調達してある。牛乳、実際には低脂肪乳だが、と卵が冷蔵庫に入っているのも確認済みだ。ホットケーキミックスを200g量り取り、牛乳と呼んでいる低脂肪乳と卵を混ぜ合わせる。嫌な予感はしていた。この時点で、粉と水分とのバランスがおかしい。作り方の説明を熟読する。分量は間違えていない。だが、圧倒的に粉が多くて混ざらない。牛乳を加える。それでも足りなくて水を加える。コッペパンが焼けそうなほど粘土の高い塊が目の前にある。もう一度、説明を熟読する。分量は間違えていない。ホットケーキを焼くのは得意で、失敗したことがない。しかし、今日の前にあるこれを焼いても、いつものホットケーキができあがるとは思えない。それでも後には引けない。焼いてみる。表面は焼けるが、中が焼けない。固まらないので、ひっくり返せない。試行錯誤していたら、ポロポロのそばろ状の何かが出来上がった。それに大きな塊がいくつか。父親はひとくち食べたところで手が止まってしまったが、三姉妹は喜んで食べている。形や固さは滅茶苦茶だけれど、味は間違いなくホットケーキだ。ただ、食べていていい気持ちはしない。そばろ状のそれを盛大にカーペットにこぼしながら食べる三姉妹は。食後には、カーペットをはずして外ではたき、床に掃除機をかける。何が悪かったのかまるで分からない。ccとmlの単位変換を調べたりもしたが、父親の落ち度は見つからない。

風が強く、雨が降ったり止んだりしている。三姉妹を家の中で遊ばせることにする。子供部屋で遊ぶ三姉妹を。子供部屋にはベッドが置いてあって、きっとベッドの上で遊んでいるのだろうとうことは声で判断できる。ベッドの上で遊ぶなど叱ってもいいのだけど、放置することにした。父親も子供のころにはベッドや押入れの中で遊んでいたことを思い出す。母親に見つかる叱られていた気がするが、まあ、子供はベッドや押入れで遊ぶ存在なのだろう。そういえば、食パンを食べる時にちぎって小さく丸めて食べるのが三姉妹の最近のブームになっている。食事のマナーには反している。注意もしくは警告を与えるべきか。ここでも父親は自分が同じことをしていたことを思い出す。子供というのはパンをちぎって小さく丸める存在なのだ。そして父親であるミヤザキシんヤは、2013年の時点でそういった行為をしていない。つまり、パンを小さく丸めるという行為は幼少期特有の行動であり、放置しておいても問題ないように思える。挨拶をするとか靴を並べるといった幼少期から練習しておくべき獲得型の行為とは違い、近いうちに自然と失われるであろう行為なのだと認識する。食べ物で遊んではいけないと大人は言うが、そもそも星のたくさん付いたレストランのシェフだとかパティシエの料理を見ると、遊んでいるようにしか見えない。料理に限らずだが、遊びかそうでないかという境界線は明白ではない。子供たちは、出された食パンを使って自分たちで新たな料理を作っているのだ。そう認識すると、父親は些細なことで腹を立てずに済む。

三姉妹が子供部屋で遊んでいる間に、家事をしたり読書をしたり日記を書いたりして過ごす。あいかわらず睡魔が襲ってきて、意識が朦朧としている。根性だけで体を動かすと、昼食の準備に取

り掛かる。と言っても、インスタントラーメンにキャベツを入れるだけなのだけど。インスタントラーメンを入れている引き出しには、そうめんやパスタ、レトルトカレーなどお湯で加熱すると食べられる系の食品が収納されている。引き出しを開けると、パスタが少ない。買っておかなければ。家の中に何があって、何が足りないか、まだ把握できていない。トイレトペーパーや洗剤など、気になるたびにそれが入っているらしい戸棚を開けて在庫を確認する。平日は買い物に行く時間がない。買い物はできるだけまとめて済ませたい。午後からの買い物を脳内でシミュレートしながらラーメンを食べる。子供たちはそれだけでは足りなくて、朝の残りのホットケーキにはなるはずだったアレを出す。そぼろ状のソレを盛大にカーペットに散らかす子供たち。再び、カーペットを外ではたき、掃除機をかける。同じことを何度も繰り返す存在である子供を相手にしていると、その世話をする親も同じことを何度も繰り返すことを強いられる。それでも、と思う。大人は子供よりも神経細胞の織り成すネットワークをうまく使うことができる。同じことを何度も繰り返す時に、きちんと脳を使っていれば、つまり考えながらやっていたら、次第に効率よく作業をこなせるようになっていくことが期待できる。子供の脳は柔軟かもしれないが、それだけで大人は子供にかなわないと判断するのは間違っている。脳の使い方に関しては、30代や40代の方が断然うまい。子供の発想力を絶賛する声もあるが、子供はただ思いついたことをブレーキをかけることなく口にするだけだ。子供に比べて点と点とを繋ぐ能力に長けた大人が本気でバカなことを考え出したら、子供には到底できないような発想ができるはずだ。子供に振り回されて、子供が主、大人が従となりがちだけれど、一緒にバカやってれば、大人も十分にバカになる能力があるので、そこに主従関係はなくなる。その方がストレスが溜まらなくていいのではないかという気がする。

雨が上がったので、三姉妹を外に追い出す。団地の敷地内の公園なら、比較的安全に遊ばせられる。その間に、また意識を朦朧とさせながら、家事やら読書やらに取り組もうと試みる。当面の数日分の夕飯のメニューがイメージできると、三姉妹を連れて買い物に出かける。維持費の高さから、そして地球のために、手放そうと考えている車を傷つけないように気をつけながら。イオンに到着すると子供たちをキッズスペースに置いて、ひとりで食料品売り場に向かう。野菜の相場が分からない。初心者なので、最初は値段の安いものを選んでカゴに入れる。品質が悪ければ、次からは価格帯を上げよう。価格と品質のトレードオフを考慮しながら買い物をするスキルはまだない。価格だけを基準に、目当ての食材をそろえていく。これで4日分の夕飯はまかなえるだろう。2,500円になった。4日で2,500円ということは、1ヶ月だと休日の昼食分も入れて20,000円を少し超えるくらいか。4人家族の1ヶ月の食費の目安はどれくらいなのだろう。ファイナンシャル・プランナーの資格は取得しているが、その科目の中に食費の目安など存在しない。あとでネットで調べることにしよう。経済ジャーナリスト荻原博子の顔が浮かぶ。

夕飯はちょっと豪華に見えた。豚肉のステーキとみそ汁。お湯を沸かしている間にフライパンを加熱してる間に大根を切る。豚肉を焼いている間にみそ汁に具を投入する。ステーキを皿に盛り付け、子供たちに運ばせている間に、味噌をとく。私の記憶が確かならば、和の鉄人、道場六三

郎は言った。料理で一番大切なのは段取りである、と。段取り力をアップさせれば、複数の料理を並列調理をしつつ、できたてのものを食卓に並べることができる。さらにその段取りの中に調理器具や食器の洗浄を組み込めば完璧だ。他のことに多くの時間を回せるようになる。料理だけでない。掃除も洗濯も、段取り力、言い方を変えるとタスクスケジューリング能力を向上させることで、作業効率が上がる。いかに効率の良いパイプライン処理系を構築するか。捻出した時間はまるまる自分のために使うことができる。魅力的だ。パイプライン処理で食べ終えた食器を随時処理しながら、三姉妹と一緒に夕飯を食べる。食事中的子供たちのテンションは高い。これまでは母親からミリ単位で叱られていたのが、放任主義ともいえる父親から放置されている。ストッパーの外れた子供たちは大騒ぎし、父親はそれを元気で何よりだなあと眺めている。でも、みそ汁をこぼさないでくれよと願いながら。願いも虚しく、サクがみそ汁をこぼす。注意して観察していたので、ふざけてこぼしたわけではないことは分かっている。次からは注意してねとひと声かけると、テーブルとカーペットのみそ汁を処理する。父親にとっては災難ではないが、今日はカーペットにとっては厄日だ。結局、洗濯機で回されるはめになる。

夜はこれまでの教訓を活かして、時間差攻撃をしかけることにした。長女ヒマはひとりだと、おとなしく寝つきも良い。妹たちと一緒にしたときに限り、化学反応を起こし活性化する。そこでまず、8時半に妹たちを布団に入れる。しばらく騒ぎ声が聞こえていたが、やがておとなしくなる。マンガを読んでいるヒマを9時まで待機させ、それから寝室に送り込む。さすがにヒマひとりだと、おとなしい。時間差攻撃は大成功だ。もっとも、それが翌日もうまくいくと期待すると、期待を裏切られてストレスが溜まることになる。まあ、うまくいく日もあるさと、軽く考えておくのが良い。ミクロの目で見てみる。粒子レベルで観察すると、各粒子はバラバラに動いている。全体を見た時にはじめて、おおむね予想通りの動きをしている。子育てにおいても、同じことをしてうまくいく時もあれば、そうでない時もある。しばらくやってみて、おおむねうまくいくことが分かれば、それでいいのではないかと思う。

毎日元気いっぱい楽しく過ごしている三姉妹。母親がいなくなってしまった寂しさや悲しみなど微塵も感じられない。ブレーキが壊れたように笑い合う子供たちを見て、ミヤザキシンヤが母親の存在とは何だったのかという疑問を持つのも不思議なことではないように思う。三連休の最終日。敬老の日。昨日思い切って元妻の母親に孫の顔を見せに行きたいと申し出たところ、思いのほか喜んでもらえた。しかし、用事があるらしく、今日は会いに行くことができない。敬老の日のプレゼントに買った2台のiPad miniは、どちらも渡せないまま運動会の日まで押入れに眠らせておくことになりそうだ。朝は読書をして過ごす。上の2人はマンガを読んでいる。三女サクはまだマンガには興味がないらしく、オモチャで遊んでいる。どこか遠くに出かけたい。今はまだ自家用車を所有しているのでどこかに出かければいいのだが、なぜだか行き先が思い浮かばない。父子世帯になって少なくとも1ヶ月経ってみなければ、父子世帯の家計の状態が分からない。どれくらいレジャー費に使ってよいのか判断がつかないのだ。とりあえず三姉妹を公園に追い出し、本を読んだり日記を書いたり、なるべくゆったりと過ごす。

家の中のどこに何があるのか、おおよそ把握しかけてきている。ただ家計に関してはまだ把握することができない。家計簿をつけるのが趣味だった妻が残した家計簿を見ると、これまでの家計の状況は確認できる。しかし、買い物をする時間がないため、できるだけ安く買うということができない。食費や日用品費がどれくらい増えるのか判断できずにいる。あまり神経質になると、自分に言い聞かす。いきなり生活できなくなるほど家計が苦しくなるわけではない。借金は無いし、多少とはいえ貯金はある、むしろ借金まみれの国家が経済破綻するほうが可能性が高いと言えるかもしれない。それに、資本主義経済依存症だからこそお金の心配をするわけで、依存症を克服すればその不安は取り除かれる。家計はどうにでもなる。それよりも、レジャー費をもっと増やせ。子供の成長は貯蓄を待ったりはしてくれない。そうだ、旅に出よう。運動会シーズンが終わったら、旅に出ることにする。旅は人を育てる。旅の経験の少ないミヤザキシンヤは、旅に対して過度の期待感を抱えている。

残り物。それだけで昼食をまかなうことにする。冷えたご飯をレンジで温める。冷えたみそ汁をコンロで温める。卵とふりかけ、好きな方を選ばせる。そして、梅干し。三姉妹は梅干しが大好きだ。父親も子供の頃は梅干しが大好きだったのを覚えている。次第に食べる機会が減り、疎遠になっていった。結婚してからはほとんど食べていないので、少なくとも10年間は梅干しと離れて暮らしていたことになる。理科で反射について習った時、梅干しを見ただけで唾が出るのも反射だと教わった。しかし、梅干しを見ても唾が出ない当時のミヤザキシンヤは、その意味をまったく理解していなかった。それなのに、今、梅干しを目の前にして、口の中は唾液が充満している。これは大人になったということなのだろうか。そういえば、かき氷を食べても頭が痛くならないミヤザキシンヤは、そう主張する人々を訝しげに見ていた記憶があるが、今なら頭が痛くなるのだろうか。キュウリにハチミツをかけるとメロンの味になるのだろうか。残り物だけの、

それでも豪勢な昼食をとる。子供たちが大人には理解できないジョークで盛り上がる。条件反射、知識や思考能力、子供たちに近づくほど子供たちとの差を感じる。戻らなければ。小学生に戻らなければ。言い知れぬ焦りを感じる。

家の中にあるもの、洗剤や紙類のストックなど、を把握するのに比例して、足りないものが分かってきた。平日は買い物に出るチャンスはない。iPhoneに入力した買い物リストを眺めて、店を決める。三姉妹に買い物に付き合うか聞くと、面白いことがないからと断られる。留守番をさせて、買い物に出る。三姉妹だけで留守番をさせるのには、まだ少し不安がある。半額運用のみまもりケータイとゼロ円運用のiPhone 4の存在が頼もしい。店に着くと、ショッピングカートを引き張り出し、必要な物を次々と放り込んでいく。できるだけ滞在時間を短くしたい。子供たちがもう少し大きければ、ひとりきりの時間を楽しめるのだろう。しかし、もうしばらくは不安とともに外出せざるをえない。帰宅して、楽しそうに遊んでいる三姉妹を見てひと安心する。三女サクは朝からピアノカ、彼女はピアノカと呼んでいる、を吹いている。外には大きな音は漏れていなかったの、これくらいであれば近所迷惑ではないだろう。子供たちのすることは基本的に許す姿勢でいる父親だが、ソファから飛び降りたり大声で叫ぶなど近隣の住人に不快感を与えるような行動をとる時には厳しく叱る。クレームを受けるのが嫌なのではない。他人が不快感を感じているという状態に、自分も不快感を感じるのだ。それがたとえ見ず知らずの他人であっても。地下鉄のホームで罵声が聞こえると、胸が痛む。みんなが幸せに暮らして欲しい。それがミヤザキシヤにとっての世界平和だ。

世界平和。就職面接で、目指していることを聞かれてそう答えたことがある。その時は鼻で笑われたが、それはミヤザキシヤの説明不足によるものだ。世界平和と言っても、大きな話ではない。例えば、街をきれいにしましょうと言うとする。通りをゆく人々がゴミを拾う。すべてのゴミを拾うのは大変だ。ミヤザキシヤもゴミを見て見ぬふりすることは多い。それでも、数十個に1つくらいは拾ってゴミ箱に入れるだろうか。ここで、通りをゆく人が100個に1つゴミを拾うとしよう。そうすると、あるところに落ちているゴミは、100人の通行人が通り過ぎた時には無くなっているだろう。頑張ってゴミ拾いをするのではなく、100個に1つ気が向いた時にゴミを拾えば、街がきれいになる。1週間に1日だけ笑顔で過ごす日というのを作ってみる。ひとりひとりを見ると、大したことはしていないように見える。しかし、70億人全体で見ると、確実に世界平和に近づいているように見える。世界平和に努力はいらない。三姉妹との新しい生活も、苦しみながら乗り越えようというつもりはない。子供が悪さをしたときに許す回数を増やす、子供の行動を観察して褒める回数を増やす。1日数回の積み重ねが、全体的に見ると幸せだと言える日々をもたらすだろうと思う。気を張っていないので、良くないことが起こってもある程度なら受け流せる。ミヤザキシヤはそうやって、日々を飄飄と生きている。

どこにも連れて行かなかった代わりに、公園で一緒に遊ぶ。長女ヒマにせがまれてボール遊びをする。大きめのボールでキャッチボールをしてたら、いつの間にかサッカーになっている。サ

ッカーをやっていたかと思えば手を使う。ルールなど存在しない。楽しければいい。シヨンとサクは滑り台で遊んでいる。ヒマとボール遊びをしながら、たすき掛けしているカメラで適当に写真を撮る。何のために撮っているのかは分からない。家の中の構えた感じではなく、自然な表情が撮れることに魅力を感じているのかもしれない。そういえば、子供と遊んでいると父親も笑顔になっているのを感じる。子供同士のジョークにはついていけなくても、体を動かしていると一緒に楽しむことができる。それはつまり、遊んでいるうちに小学生の頃の感性を取り戻しているということなのかもしれない。このまま遊んでいたい、日が傾いてきて父親に戻る。夕飯の支度をしに帰る。豚肉をピーマン、ニンジン、もやしと共に炒めるだけ。焼肉のタレで味を付ける。本当はもう一品何か必要なのだろうと思うけれど、今は仕方ない。とりあえず三姉妹が喜んでいるのでよしとする。時間をつくってクックパッドのレシピを漁らなければ。味、栄養、手間のバランスのとれた料理が必要だ。

夜は昨日に引き続き、時間差攻撃を仕掛ける。下2人を先に寝かせて、30分後にヒマを寝室に向かわせる。昨日はうまくいった。今日は、下2人がいつまでも騒いでいる。それでいい。毎日うまくいく必要はない。おおむねうまくいけば成功だろう。完璧を目指すつもりなどない。以前は夫婦の部屋だったが今は自分専用のもとなった部屋にこもり、連休の間に読んでいた本を読み終える。福岡伸一の「生物と無生物のあいだ」。動的平衡の感覚は、実にミヤザキシンヤ好みだ。固定しない。強さよりも、しなやかさ。しかし、過去に既読だったこの本で今回注目したのは本編ではなくエピローグだ。少年時代にチョウの蛹を観察した思い出などが事細かに記されている。クレイジーな人間、Apple社のThink Different的なクレイジーさだが、が大好きで、クレイジーな著名人を見つけてはネットストーキングをしている。クレイジーな人間がどうやって出来上がるのかに強い関心を持っている。そうして最近、クレイジーな人間のある共通点に注目するようになった。それは、子供の頃の記憶を詳細に言語化する能力を持っているという点だ。これは3つの要素を含んでいる。まずは、日々の些細な出来事を事細かに記憶しているということ。これは、些細なことにも感動する能力があったことを示している。次に、大人になってもその記憶を封印することなく、いつでも取り出せるということ。大人になっても子供の心を忘れないと言い換えてもよい。そして最後に、その記憶を言語化して他者に詳細に伝えることができるということ。つまり、脳内に映像として見ている光景を、そのまま表現している。クレイジー形成の片隅を垣間見た気がする。まとも人間である父親は、我が子にはクレイジーであって欲しいと願う。体験し、感動する。それを繰り返せば、繰り返し続ければ、クレイジーに近づくのではないか。来週も三連休だ。今度は毎日どこかに連れだそう。そう決心する。

一週間が始まる。昨日が祝日だったので、今週の稼働日は4日しかない。起きると体が重たい。休日でも体が重いだけでなく、平日のそれは少し違っているような気がする。何となくミスのできないプレッシャーを感じているのかもしれない。分単位で行動し、段取り、パイプラインによる並列処理を適切に設計して実行しなければ、仕事と家事を効率よく両立することができない。先日、保育園組がスモックを忘れてとりに帰ったが、そういったミスは命取りだ。そして平日は、子供たちを時間通りに動かさなければならない。自分以外のものをコントロールしようとしなくてストレスを軽減しているのだが、そういった意味では、三姉妹をコントロールすべき状況が増える平日は休日に比べるとストレスが若干多いかもしれない。今朝は、保育園組がさっと起きてきたので、第一関門は難なく突破したことになる。食パンにチーズを乗せて出す。比較的良好なペースで食べてくれる。これで、次の関門も突破。そうやって、ひとつずつ前に進めていく。

朝の保育園でのルーチンワークはもう身についている。子供乗せを搭載するには耐久性が低すぎる安い自転車をゆっくりと漕ぐ。後ろからションとサクがついてくる。保育園組を歩かせるためにはペースメーカーが必要だ。父親が後ろからついていく方が安心だが、前を行ってペースを作らなければならない。何度も振り返る。油断すると、植物採集をやっている。姉妹の父親も通学路の脇の植物で遊んでいたことはよく覚えている。結果的に、大学では植物の酵素を研究することになるのだから、子供の頃の体験の重要性はよく理解しているつもりでいる。植物採集も大いに結構だ。遅刻したって構わない。ただ、父親は早くオフィスに出て行きたいのだ。父親のわがままのためだけに、振り返っては姉妹に声をかける。保育園に到着すると、1階と3階の教室をまわって荷物を所定の場所に置く。その時にホワイトボードに記された連絡を見逃さないこと。先週帰るときには気付かなかった本日のプール休止のお知らせ。ションは数日前から咳と鼻水が出ていて、もともとプールは休ませるつもりでいる。それでも、ホワイトボードのその連絡を見逃していたことはミスには違いない。気をつけよう。

数日前からのションとサクの咳と鼻水が気になっている。夜中、急に冷えるようになった。日中も肌寒いことがある。季節の変わり目、いかにも体調を崩しそうだ。どのタイミングで病院に連れて行こうか悩む。福岡市では就学前の児童には医療費はかからない。ただ、保育園は遅刻を許可していないので、病院に連れていくということは、保育園を休ませることを意味する。咳は出ているが元気なションとサクの面倒を見ながら自宅で仕事をするのは、体調と精神面をあわせて今の状態では避けたいところだ。子供たちを注意深く観察する。咳が出ているのは寝起きだけ。もう少し様子を見てもいいように思える。それでも、今のうちに覚悟と準備だけはしておく。医療費に関しては、父子家庭の父親も1つの医療機関につき月800円までの自己負担で診てもらえることができる。片親だと、とにかく体調を崩すことができない。バックアップが存在しない冗長化されていないシステムだ。父親に障害が発生すれば、システム全体が停止してしまう。適当に生きているのでストレスを貯めないのは得意なのだけど、遊べない性格なのでストレスを解消する

のが苦手だ。しかも、ストレスが溜まると精神的には平気なのにも関わらず、いきなり体調を崩す傾向があるように思う。遊べ遊べと、ミヤザキシンヤは自分に言い聞かせる。

朝のルーチンワークを効率よくこなせるようになった分だけ、オフィスに向かう時間も早くなる。時間が早くなると、地下鉄の乗客が増える。9時前のこの時間は超満員の車両で押しつぶされることはないが、席は空いていない。iPhoneで日記を書きながら、倒れないようにだけ気を付ける。オフィスに到着して時計を見ると、5人家族だった頃とそれほど変わらない時刻だ。席について、今度はMacで日記の続きを書く。文章を書くことで、脳が活性化していくのを感じる。すぐに仕事に取り組むよりも、効率がいいはずだ。脳のエンジンが始動する。だが、体はまだ重たい。買い置きしておいた栄養ドリンクを飲み干す。朝の薬は戦略的に飲み忘れていた。これで、午前中は飛行し続けられるはずだ。いくつかのイレギュラーな作業をこなし、直近のメインテーマである大きめのシステムの設計に入る。できる限りシンプルに考えようと試みる。何事もシンプルにしたい。システムの設計も、日々の生活も。

昼食は先週に引き続き、体に良いのか悪いのかいまいち分からない、フルーツグラノーラを食べる。カルシウムや鉄分が多めの低脂肪乳に浸して。昼休みの間に日記を仕上げる。今日はちょっと書き過ぎた。4,000字を超えている。書こうと思えばまだまだ書けるのだが、この辺で止めておこう。学生時代は原稿用紙1枚を書くのも大変だったのに、いつからこんなに文章を書けるようになったのだろうか。小学生の頃、同級生の誰よりもたくさんの本を読んでいた。図書館で昼休みと放課後、1日2冊の本を読んでいた。太陽の下で外で元気に遊んでいた記憶もあるので、一体どうやって読書時間を捻出していたのか不明だ。とにかく、1年間で600冊は読んでいたので、クラスで1人だけ読書カードを大量に保有していて、何だか誇らしげな気持ちでいたのを覚えている。その読書の効果なのかどうかは分からないが、大学受験も含めて現代文は一切勉強していないにも関わらず常に満点に近い成績だった。社会人になってブログをほぼ毎日書くようになった。思っていたよりも人気が出て、月に6万から7万くらいのアクセス数となった。それでも、文章はまったく上達しない。当然だ。小学生の頃の読書以来何もしていないのだから、語彙も表現も小学生で止まっている。ただ、量だけは多少は書けるようになった。小学生の書いた長文を読む読者は大変だろうけど。

5時。まだ設計が終わってないが、保育園のお迎えに向かう。設計なら頭の中でも続けられる。5時終わりの会社も多いのだろうか。地下鉄のホームは思っていた以上に混み合っている。開発しようとしているシステムも思っていた以上に複雑になりそうだと判断したところで、気分転換にKindleで津田大介の有料メルマガを読む。1本当たりのコンテンツ量が多いメルマガが3本溜まっている。経済心理学に踊らされているミヤザキシンヤは、お金を出して購読したメルマガだからと全コンテンツを読もうとしてしまう。本当に賢い人は必要な分だけ読むのだろうと思いつつ、頭から順番に読み進めていく。この貨幣経済のしがらみから、どうにか抜け出せないものだろうか。Kindleのストレージの中には"The Moneyless Man"が半分ほど読んだところで放置されて

いる。地下鉄を降りると、家の前に止めてある価格だけで選んだ自転車に乗って保育園へ向かう。いつもなら園庭で遊ばせて帰るのだが、今日は時間がない。夕飯を2食分作る計画なのだ。

冷凍していた白身の魚、名前は忘れてしまった、をレンジで解凍している間に、野菜を切り圧力鍋に放り込んでいく。解凍が終わったら今日のおかずの魚をフライパンで焼く。圧力鍋に野菜と肉、そして水を入れて火にかける。新しい圧力鍋はまだ使い慣れない。魚を裏返そうとすると、フライパンにくっついてボロボロになってしまった。しかも、焼いてみると量が少ない。圧力鍋に入れ損ねたタマネギを小さめに切ってフライパンに投下する。醤油をかけてみた。すでに、味の保証はない。子供たちに食べさせ、案の定、美味しくないという至極まっとうな回答を得る。ここは明日の豚汁に期待しよう。圧力鍋から蒸気が出てきたところで、火を止める。本来ならばこのまま放置しなければならないのだが、慣れない新型の圧力鍋の栓をゆるめてしまった。豚肉と野菜の煮汁がものすごい勢いで吹き出す。大惨事だ。ミヤザキシンヤはこの程度のことではパニックにならない。なぜ、煮汁が噴き出しているかを、鍋の内部と外部の圧力の差を考えながら追求する。なるほど、まだ栓をゆるめてはいけないのだ。栓を閉める。この間、数十秒。コンロのまわりは煮汁が飛び散り、悲惨な状況となっている。次の課題は、どうやって掃除をするかだ。ひとつずつ解決していこう。

子供たちを寝かせると、2日分の洗濯をする。洗濯機が回っている間に、仕事の続きをする。やはり、思っていたよりも複雑になりそうだ。そして気分転換には、メルマガの続きを読む。ふと本棚を見れば、読みたい本が何冊も並んでいる。でも、あいかわらず頭にはモヤがかかっている、気を抜くと字面を追うだけで内容が入ってこない。体調が悪いのかストレスが原因なのか。新しい生活のリズムはだいぶ設計ができてきた。もう少しすると安定稼働できるようになりそうだ。そうなったら、やりたいことを片っ端からやっていきたい。シングルファーザーのプライド、もしあるとすれば、にかけて、子供たちのせいでやりたいことが出来なかったとは決して言いたくない。大丈夫。やりたいことがたくさんあるうちは、精神的にはかなり余裕がある。調子の悪さは、時間が解決してくれる。そんな気がしている。

咳が気になる。次女シヨンに続いて三女サクも咳が出始めた。病院に連れて行くべきか、まだ早いのか。咳が出るのは朝と夜だけで、日中は何事もない。もう少し様子を見よう。そう決めた瞬間、いつもの朝が始まる。朝食を食べたら、ここで食パンの代わりに残り物のご飯を食べる権利をめぐる紛争が勃発する、保育園の支度をして、「あまちゃん」を覗て出かける。保育園に着く頃には咳も治まり、何事も無く朝のルーチンワークが完了する。自転車と地下鉄を乗り継いでオフィスに到着。見知らぬ番号から着信がある。見知らぬ番号と言っても、携帯電話を持つようになって以来数字の羅列を意識することがなくなっているの、知り合いのものであっても見知らぬ番号ではあるが。留守電も入っていて、中央郵便局から郵便物についての問い合わせのようだ。かけ直して、郵便物の配送先を伝える。席につくと昨日と同じように、日記の一部を書くことで頭のエンジンを回転させる。いつもと変わらない朝、というものがようやく形づくられた感じがする。

昨日に引き続きシステムの設計をする。予想以上に既存システムへの影響が大きい。設計の範囲を昨日よりも広げる。こうでなければならぬ、と考えるべきではない。と言うとパラドックスになってしまうが、ひとつだけ間違いないのは、複雑にすべきでないということだろう。どうやってキリンを冷蔵庫に入れますか？というクイズを思い出す。答えは、冷蔵庫の扉を開ける、キリンを入れる、扉を閉める。要は、自分で勝手に前提条件を作ることによってシンプルな問題を複雑な問題に変えるなということだ。シンプルに考える。目的地をハッキリさせる。今いる地点を確認する。目的地に向かってまっすぐに線を引く。昼食もシンプルだ。開封済みのフルーツグラノーラと、賞味期限の迫った牛乳がある。コンビニで弁当を物色する代わりに、フルーツグラノーラを牛乳に浸して食べる。あえて複雑にするとすれば、牛乳ではなくて低脂肪乳だったと付け加える。

気分転換にFacebookのタイムラインを眺めていると、自社の資金調達のニュースが飛び込んでくる。Twitterで社名を検索して、反応を見してみる。ミヤザキシヤはそのニュースを人ごととして捉えている。ここは本社から遠く離れた自治体だ。自力で財政を切り盛りしていかねばならない。それに、本社から多大なる支援を受けているとはいえ、本社はライバルだ。と勝手に考えている。本社のニュースを目にするたびに悔しい思いをする。自分たちも、自分たちの手で、実績を出したい。ミヤザキシヤ以外には理解できない、もしかしたら本人の中でもスッキリしていないかもしれない、本社との関係はキリンを冷蔵庫に入れるよりもずっと複雑だ。いつまで続くのかも分からない。ただ、自分の意志でそうしているという自覚だけがある。すべては自己責任だ。保育園のお迎えの時間が近づいてくる。この生活を選んだのも自分の意志に間違いない。

保育園に着くと、サクの具合が良くないことを告げられる。咳がひどくなり、微熱があるようだ。元気なシヨンは家に向かって走ってゆく。子どもシートを搭載する耐久性のない価格の安さだ

けで選んだ自転車のサドルにサクを乗せて追いかける。帰宅すると、サクはそのまま布団に横になる。もう病院は閉まっている。昨日仕込んでおいた豚汁に味噌をとくと、予約炊飯しておいたご飯をよそう。それに、しらすを加えて食卓に並べる。良く言えばシンプルだが、品数が少ないのは気のせいではないだろう。それでも得意料理の豚汁にヒマとシオンは大喜びしている。シオンは一口食べただけで、また作ってくれとリクエストしてくる。2人が食べ始めるのを確認して、サクの様子を見に行く。食欲が三姉妹の健康状態を示すバロメーターになっている。よほど体調が悪くなければ、食欲が落ちることはない。夕飯を食べるかという問いに首を横に振るサクを見て、夜中に救急病院に向かうことになる可能性を覚悟する。

食事と入浴を済ませるで、ヒマの宿題の採点をする。今日は漢字の書き取りだ。園の字が間違っている。書き直させるが、やる気がないため正しい字にならない。書いて消してを何度も繰り返しつつ、同じ回数だけ言の字のバランスを褒める。やる気を失わせるのは簡単で、いったん失われたやる気を回復するのは難しい。今できるのは、やる気を失わせるような言動を取らないことだ。褒めてもやる気が出ない時は出ない。園の字がある程度形になったところで、今日のところは終了とする。やる気がなかったのは眠たかったからなのだろう、いつもならマンガを読んでいる時間にもかかわらず、シオンと一緒に寝室に向かう。

サクの様子をうかがうために夜更かししていたが起きてくる気配がないので、それでも万が一に備えてサクの隣に横になる。明日は保育園は休みだろう。おそらく父子家庭の最大の悩みとなるであろう子どもの病気という現実いきなり直面してしまった。職業柄、自宅で仕事ができるとはいえ、病院や看病で稼働時間は減るだろう。また、三姉妹はひとりが病気になると、タイミングを絶妙にずらしながら全員に広まる。せめて自分だけは体調を崩さないようにと、何の具体策もなく珍しく精神論だけで対処しようとする。まずはしっかり睡眠。しかしその思いも虚しく、サクに何度か起こされては半ば無意識のまま世話をすることになるのだった。

シングルファーザーにとって悪夢のような日。それはきっと、子どもが急に熱を出した日なのだという気がする。サクがうめき声をあげている。触れると熱い。体温を計ってみると39度に達している。昨日から調子が悪かったため急な発熱ではなく、すでにある程度の覚悟はしている。Facebookのメッセージを立ち上げて、午前中に病院に行くこととその後は自宅で仕事をすることを伝える。Facebookで仕事をしている組織では業務連絡もFacebookだ。日中はSkypeを頻繁に使うけれど、早朝など時間差があるときにはFacebookメッセージが便利だと思う。通常の開発はMacで行うが、緊急時には地下鉄内でiPhoneを使ってトラブル対応をすることもある。ノマドではないけれど、いざとなればノマド的な働き方ができる状況は、シングルファーザーの悪夢を軽減してくれる。

先に咳が出始めたにもかかわらず、シオンは元気だ。シオンひとりなので、子どもシートのない自転車に無理やり2人乗りして保育園に向かう。警察官舎の前を2人乗りして通ると怒られそうな気がするが、今は緊急事態だと自分に言い聞かせる。まあ、ルール違反をする人はたいてい自分に言い訳しながらやっていると思うけれど。シオンを教室に連れて行ったところで、スモックを忘れてきたことに気付く。サクなら気にしないところだろうが、シオンはナイーブなところがある。どうしても取りに帰ると言って聞かない。短時間で取りに帰れるよう、シオンを保育園に置いてひとりで移動する。ひとりで自転車に乗っているときに限り、自宅と保育園とはかなり近い。忘れ物を取りに帰ってもそれほどのロスは発生しない。見上げると高い位置に取り付けられたフェンスに朝顔が咲いていて、写真を取りたいなと考える余裕もある。家に着くと、サクの様子を確認し、スモックとカメラを持って再び保育園を目指す。保育園で先生にサクの欠席を告げる。もともとサクが体調を崩したのは昨日のお迎え時に先生から聞いて知ったので、先生も状況は把握しており、やっぱり悪くなりましたかと心配そうな表情を浮かべる。そういえば、先生方は姉妹の家が父子家庭だと知っているのだろうか。知っていれば何かしら優遇してもらえるなどという甘い考えは持っていないのだけれど。

病院は8時半には開いている。だが、開院ギリギリで行くと混雑しているかもしれない、という完全な推測のもと10時くらいまで待機することにした。サクの状態も見て移動手段を決めなければならない。時間まで仕事をする。キリが悪くて、家を出るのが10時半になる。昨晚から何も食べていないサクだが何とか動けそうだったので、再び自転車の2人乗りで病院に向かう。子どもの病気を考えると、子どもシートを取り付けた方がよさそうな気がする。かかりつけの小児科の待合室にはほとんど人がおらず、タイミングがよかったのか、そもそも平日はそんなものなのか判断はつかない。すぐに名前を呼ばれて診察室に向かう。食べることができていないということで、点滴を打たれることになる。保育園を休んで病院に連れてくる覚悟はできていたが、点滴を打たれることになるのは予想していなかった。MacBookを持ってくればよかったと後悔する。ベッドに横になるサク。いつもよりも小さく見える。右手に針を刺される。その小さな手の静脈にはたど

り着けず、いったん針を抜かれる。今度は左手に針を刺される。サクは少し眉をひそめただけで、痛がる様子はない。単にその元気もないだけなのだろうか。目だけをキョロキョロ動かして、まわりの様子を見ている。時々目が合うが、その視線はすぐに外れてしまう。何を考えているのだろうか。子どものころの記憶がほとんどない父親は、我が子が何を考え、そして将来この状況を思い出すことがあるのか、何故だか気になっていた。

ベッドの上には遊ぶものが何もない。もっとも遊ぶものがあつたところで、今のサクには遊ぶ元気はなさそうに見える。父親がiPhoneをいじっていては寂しいだろうと、ネット中毒でiPhone中毒患者のミヤザキシヤは只々子どもの顔を見つめている。サクはあいかわらず目だけをキョロキョロ動かしている。普段はチョロチョロ動き回っているサクの顔をこんなにじっくりと見つめたことはなかつたろう。顔の輪郭、目の形、事細かに観察する。そのうち、瞬きの瞬間、まぶたがくっついている時間がミリ秒単位で長くなっていく。寝たかと思うとまた目を開けてキョロキョロする。それを数回繰り返し、ついに眠ってしまった。iPhone中毒患者はiPhoneを取り出して、まずは日記を書き、FacebookとTwitterをチェックし、そしてバッテリー残量が少ないことに気付く。仕事に戻ろう。今日はシステムの設計を完了させる。紙とペンすらない。すべてを脳内で行う究極のノマドワークだ。サクが寝るようにと電気が消してある薄暗い病室は他に患者もおらず、ナースの話し声と物音だけが聞こえてくる。プログラミングをする時にはマクドナルドの雑音の中が一番はかどるが、考え事をするにはこれくらい静かなのもいいかもしれない。シンプルに考えよう。頭のなかで、ひとつひとつパーツを厳選して組み立てていく。薄暗い脳内にシステムの輪郭が浮かび上がる。この2日間苦しんだのが嘘のように、ずっとその構造が目には浮かぶ。もちろん、苦しみながら考えた積み重ねが、今この瞬間につながっているのだろう。ただ、環境の大切さというのを再確認する。オフィスの机に向かっているのが必ずしも正解ではない。

サクが咳き込む。ナースが容器を持って駆け寄ってくる。かなりの量を吐く。最後には吐くものもなくなって、つらそうにしている。背中をさする。背中から熱が伝わってきて、熱が高いのもさぞつらいだろうと思う一方、その熱に生命力を感じて父親の不安はいくらか軽減される。安心すると、腹がへる。医師に呼ばれ、診察室で説明を受ける。レントゲンを見ると気管支に炎症を起こしているが、血液検査の結果は問題ない。処方箋を出され、今のうちにと薬局で薬をもらう。酸味があると苦くなる薬と、酸味のある薬を一緒に出される。その他にも薬が出され、説明を受けるが頭に入ってこない。頭の中で薬剤師の言葉を何度か繰り返し、記憶に定着させる。近くのスーパーでちょっとつまめるチョコレート菓子を買って病院に戻ると、出入口が半分塞がれて昼休みになっている。サクのところに戻ると、おとなしく寝ている。昼休みのナースたちの女子トーク、内容までは聞こえてこないが、を聞きながらチョコレートを口に運ぶ。4つほど食べたところで、コーヒーとお菓子を持ってきてもらった。点滴の量を追加するという報告を聞き、今日の昼食はお菓子で済ませることになるのだと悟った。

コーヒーを飲みながらサクの寝顔を見つめる。彼女は幸せだろうか。母親がいなくなって、三姉

妹は水を得た魚のように元気になった。その様子を見ながら、母親の存在とはなんだったのかと考える。しかし、結婚したことは後悔していないし、子どもを3人生んだのも間違っていなかったと感じる。10年間つらい思いだけではなく楽しい思い出もたくさんある。これまでは、離婚した人というのは結婚を失敗した人だと思っていた。しかし、離婚を体験したミヤザキシンの感想は違った。結婚も成功したし、離婚も成功した。成功続きの人生じゃないかと感じる。体験してみなければ、認識を誤る。片親の家庭の子が不幸だという認識も誤っている。三姉妹は毎日楽しく過ごしているのではないか。ミヤザキシンの持論がある。世界は現実で成り立っているのではない、現実であるという認識で成り立っているのだ。上司に怒られたとする。怒られたというのは現実ではない。上司が大声を出したというのは現実だ。上司が怒っているというのは自分の認識でしかない。嫌な態度を取られたと認識するのか、自分のためにメッセージを伝えようとしてくれたと認識するかは自分しだいなのだ。自分が今苦境にあると考えていても、認識を変えると苦境ではないことに気付く。三姉妹のシングルファーザーをしながらベンチャーで働くというのは、大変だねと声をかけてくれる人もいるが、見方を変えると、3人の子を育てながらビジネスも成功させればその見返りは大きいように思える。行政から支援を受けながら、会社には迷惑をかけながら、申し訳ない気持ちもあるけれど、育児も仕事も実績を出せば恩返しできるのではないかと考えている。

点滴が終わったのは2時半で、実に4時間も病院にいたことになる。サクはまだまだつらそうにしているとはいえ、だいぶ調子が良くなったように見える。何が食べたいか尋ねると、ホットケーキと答える。スーパーでホットケーキと牛乳、今日は低脂肪乳ではなく、とほうれん草を買って帰る。帰宅すると、サクにホットケーキを食べさせながら仕事の続き。ヒマが帰ってきて、ションのお迎えの時間になる。夕飯は昨日の豚汁が残っているので、ふわふわ玉子焼きを作る。サクはご飯には手を付けず、豚汁を少しだけ口にする。今日もご飯が残る。ご飯を何合炊くかというのが最近では一番面倒な問題だ。父親は食べ終わるなり調理器具と食器を洗い始める。次々と食べ終わる子どもたちの食器も洗い、食後速やかに洗い物を済ませる。夜の時間を確保するために毎日実践している戦略だ。ヒマとションは食事の支度をしている間に風呂に入れている。あとは、歯を磨いて寝るだけ。夜のルーチンワークも効率が良くなってきている。自分もシャワーを浴びて、洗濯機を回す。子どもたちに催促されて、寝室で横になり、会話をしながら自分の昔話を聞かせる。今日は、高校の成績の話から、大学でやっていた酵素の研究の話、海外の話から戦争の話まで広がっていく。ションは、戦争の話が怖がり、聞きたくないと言っている。松江市の「はだしのゲン」の閲覧制限問題が脳裏をよぎる。ベッドから飛び降りるなというのと同じ口調で、大人になっても戦争はするなと警告する。カジュアルに警告を発して、父親が戦争するなと言っていたから戦争しない、というような軽い気持ちで戦争に手を染めなくなるのも悪くないと思う。何も伝えないというのが、一番良くないだろう。子どもたちに伝えるためにも、自分ももっと戦争のこと世界のことを知らなければと父親は思う。

子どもたちがおとなしくなったところで、起き上がり洗濯物を干す。これから自分の時間だ。就

寝希望時刻まではかなり余裕がある。病院で考えたシステムの設計を紙の上に再現する。細かいところは追々検討するとして、大枠は問題無いだろう。昨日に引き続き津田大介のメルマガを読む。チームラボの猪子寿之があいかわらずおもしろい。彼もファミコンやジャンプなど少年時代の感性をそのまま持ち続けているクレイジーな人間だ。保育園や小学校でもそれなりに刺激のある日々を送っていると思うが、もっと刺激的な体験をさせてみたい。それは、たとえ父子家庭でなかったとしても、父親の役割である気がする。何となくではあるけれど。

このところ天気がいい。天気がいいと保育園への送り迎えが楽だ。それに、洗濯物が乾きやすい。三姉妹の下着の枚数を考慮して、洗濯物を溜め込めないギリギリの生活を送っている。リュックに着替えが入っていることを確認すると、シオンを自転車に乗せて保育園に向かう。サクは腹痛を訴えているし、微熱があるので今日も休ませる。問題は長女ヒマだ。咳がひどく、微熱もある。昨日のサクと同じような症状に見える。それでも、かろうじて元気はあったので、小学校に行かせることにした。今日は本社から来客があるので、できれば昼には出かけて行きたい。ヒマを行かせたのはそういった大人の事情があったのだが、元気があるから行かせたのだと言い訳をする。もちろん、学校から電話があれば飛んで帰る覚悟はしている。昼前まで寝ていたサクは、あり変わらず咳が出ているが腹痛はなくなったようだ。サクを連れてオフィスまで出て行くことにする。まだ歩くのがつらそうなサクを抱いて地下鉄のホームまで降りる。この時間は地下鉄の本数が少ない。サクをベンチに座らせて、何枚か写真を撮る。何のために撮っているかは分からない。いつもならポーズを決めるか、レンズを避けるようなアクションをするサクが、今日はおとなしく座っている。

オフィスに着くとすでに本社の人に来ていて、手早くミーティングを始める。サクはソファに腰掛けて、食べたがっていたドーナツを食べている。今後の展望というよりも、単に自分のやりたいことを伝える。生活が落ち着いていれば、年内には大きなリリースができるはずだ。今はまだ、どうなるかわからないけれど。考えていることは、包み隠さず伝える。お互いに信頼し合うしか道はないように思える。ドーナツを食べ終えたサクは横になり、オモチャで遊んでいる。Macを立ち上げてリリースされたばかりのiOS 7をインストールしようと試みる。時間がかかりそうだ。みんなで昼食を食べに行くことにする。近所の評判の良いとり天の店は、あいかわらず客が多く10分待ちとなる。2階へ続く横に壁のない階段を上る時、サクが怖がるだろうと抱いて上がる。新しい生活が始まって以来、今日が一番抱いている時間が長い。スキンシップもとらなければと、漠然と考えたりする。とり天定食を親子で分け合って食べながら、大人同士は子どもの話や父子家庭の話になる。飄飄としたミヤザキシンのポジティブな発言は、本社の人を安心させたかもしれない。でも、安心させるために言ったのではなく、少なくとも今日は心の底からポジティブだった。

3時を過ぎて、かかりつけの心療内科へ向かう。ここでもポジティブ発言を繰り返し、以前ミヤザキシンを飄飄としていると診断した医師は、今日もまた飄飄としているとの診断をくださった。この心療内科とここで処方された薬を出してもらう薬局は、自立支援医療に登録しているので自己負担は1割で済む。今回新たに、ひとり親の医療証を提示すると、こちらの方が薬代が無料になるのでトータルで医療費が安くなることを知る。薬局で薬を受け取って、家路につく。このころには、サクも自分で歩けるようになっている。父親はなんだが疲れている。家に帰ると、座椅子にぐったりともたれかかる。ストレスを溜めないのは得意だが、溜まったストレスを解消するの

が苦手だ。とり天の店と心療内科で、同じ話をした。心療内科では日中に眠くなる話もして、ストレスが原因だろうと言われた。正直、ストレスは感じていない。昔からそうだった。いきなり体に来る。ということは、はやりストレスがあるのだろうか。5人家族だった頃のストレスが抜けていないのか、4人家族になってからのストレスなのか、判断はつかない。

どれくらい時間が経っただろうか、ヒマが帰ってくる。体調が良くないであろうことは、見ただけで判断できる。ヒマはそのまま布団に横になってしまう。ヒマが帰ってきたら、保育園のお迎えの時間だ。重たい体を引きずって外に出る。天気の良い日が続いているが、寒暖の差が激しく、いかにも体調を崩しやすい気候だ。最初に咳をし出したションが一番元気なのが不思議な気がする。金曜日。お休みしたサクの教室にも寄って荷物を取ってくる。いつもは、2段飛ばしで駆け上がる3階までの階段が、どこまでも続いているように感じる。ホワイトボードに親子ダンスの練習日時が書かれている。今日がその1回目だ。園庭では親子が円になってダンスの練習をしている。しばらく眺めていると、練習が終わる。次々と帰宅を始める親子に混じって、ションを連れて保育園を出る。親子ダンスはションとサクのどちらと踊ればいいのかと考えながら。

三姉妹を風呂に入れている間に、餃子を焼く。餃子を焼いている間にキャベツを千切りにする。パイプライン処理だ。クックパッドで玉子スープのレシピを調べていたが、材料がそろわなくて諦める。休日の間に食料品の買い出しに行かなければ。ヒマは食卓についたものの、数口食べただけで離脱してしまう。三姉妹の体調のバロメーターは食欲だ。食べれないというのはそうとうに体調が悪いのだと判断する。ミヤザキシンの体調のバロメーターは何だろう。重たい体で洗い物を済ませる。風呂と洗濯は諦める。部屋にこもり、何もする気力がなく、MacBookで映画を再生する。エンドロールを途中で止めると、布団に転がる。ヒマが吐く。やけに重たく感じる掛け布団を風呂場で洗うと、水につけて放置する。すべて明日に先延ばししよう。明日は土曜日だから余裕があるのではないかと、淡い期待を抱いて眠る。

ひととき重たい体を持ち上げて時計を見たのが、午前10時。いつもに比べると体だけでなく頭も重たい。子どもたちの病気が伝染らないようにとだけ願っていたが、咳は出ていないし喉も正常、まだ大丈夫なようだ。起床する。意図して起床したのが午前10時ということになる。その前には三姉妹に朝食を食べさせているし、さらに夜中には吐きそうだと訴えるヒマの世話をしていた。保育園組が夏休みの前まで通っていた幼稚園の運動会がある。三姉妹の母親が3人を運動会に連れて行くことになっている。何時に迎えに来るのか、子どもたちに電話させる。ヒマはまだ具合が悪そうだ。熱を計ると38度ある。母親が迎えに来たので元幼稚園組の保育園組をあずけ、ヒマを病院に連れて行く。自転車に乗るか聞いてみるが、その元気もないらしい。病院まで歩くと意外と遠いという発見をしながら、病院までの道のりをゆっくりと歩く。病院の近くにスーパーがあるが、三連休の間の献立はまったく考えていない。何を買えばいいのか、依然頭は重たく、まったく計画が立てられない。病院では、衰弱の激しかった三女サクのときとは違って、薬だけが処方される。薬局で薬をもらい、ゆっくりと歩いて帰る。今日は暑い。

帰宅して、ヒマに朝の分の薬を飲ませる。小学2年生。錠剤を飲めるようになっていた。そうこうしていると、元幼稚園組の保育園組が帰ってくる。5人で昼食を食べるのも何だが違う気がして、母親が帰っていくのを見送る。家の中にあつた唯一4人分をまかなえる食材、そうめんを火にかける。念のため、3人分だけ用意する。それでも、ヒマとサクは早々に戦線離脱してしまい、ションが奮闘するもそうめんが残ってしまう。残ったそうめんの処理法なんて分からない。器に移してラップをかけて冷蔵庫に入れてみる。夜にでも誰か食べるだろうか。昼食が済むと、座椅子にもたれてまたグダグダとし始める。今日は何もできない。どちらにせよ、ヒマとサクの体調が戻らないと、どこかに連れて行くこともできないけれど。やがて眠気が襲ってきて、子どもたちの様子を確認すると、意図的に頭のスイッチを切る。

夕方。5時を過ぎる。さすがに、夕飯について考えなければ、間に合わなくなる。自分一人だったら間違いなく食事を抜いているだろう。三姉妹にそれを強要するわけにもいかず、とりあえず自転車でスーパーに向かう。味付きの魚か肉。冷蔵庫にキャベツの千切りが余っているので、肉がいいかもしれない。味付きのカルビがあつたので、値段には目をつぶってカゴに入れる。果物も欲しいが、吟味している暇はない。チョコレートと一緒に買う。店の外に出るなり、買ったばかりのチョコレートを開けて口に放り込む。甘いものを食べる気分ではない。それでも、頭と体を動かすエネルギーが欲しかった。自転車を飛ばして、飛ばしているつもりだったが明らかに低速運転だったと思うが、三姉妹の待つ家に帰る。ご飯が炊けるまでの間に、干していた布団を取り込む。この状況で布団を干していた自分に感心しながら。炊飯が完了したのを確認して、肉を焼き始める。味は最初からついている。焼くだけでよい。大きめの器にご飯をよそい、キャベツの千切りを敷き詰め、その上に味付きカルビを載せる。カルビ丼だ。キャベツにも軽く火を通しておけばよかった。父親の後悔をよそ目に、ションとサクは喜んで食べている。一方、ヒマは。あ

いかわらず、一口食べただけで残してしまう。こんなに食べなくて大丈夫だろうか。買い置きしておいたアクエリアスをしっかり飲ませようとする。

食べるのが一番遅いサクが食べ終わるのを待たずに、再び買い物に出る。明日の朝のパンがない。パンが無ければ別のものを食べようにも、4人分をまかなうだけの食料がほとんどない。今日は薬を飲んで運転するのは危ないと感じて、薬を飲まずに車に乗り込む。そういえば、シヨンのハーモニカに取り付けるためのネックストラップを用意するように言われていた。目的地を通り過ぎ、ダイソーに向かう。夜のダイソーは店員が少なく、レジも混んでいる。自力でストラップを見つける。次は本来の目的地であるコスモスで、食パンを3袋とフルーツグラノーラ、そしてパスタをカゴに入れる。パスタがあれば、明日の昼食は乗り越えられる。先週は一週間分の夕飯の献立をあらかじめ決めていたため、楽に乗り越えることができた。計画がなければ、三連休の間の食事の用意さえままならない。考え事ができるくらいに、せめて食事の献立を考えられるくらいに、頭が回復して欲しい。自宅の駐車場に車を止め、少し離れた家に向かって歩き出す。電子音だか耳鳴りだか分からない音が頭のなかで渦巻いている。その音を丁寧に因数分解していく。耳に当たる風の音、草むらの虫の声、そして電子音。携帯電話や目覚まし時計ではない。聞こえているのか、脳内で再生されているのかすら判断できない。家の階段が見えてきて、音への関心が消える。三姉妹はどんな様子だろうか。扉を開けると、おとなしくマンガを読んでいてひと安心する。仕上げの歯磨きをすると、早々に寝室へと送り込む。

洗い物を済ませ洗濯機を回し始めると、ひとりで部屋にこもり本を読んでいたが、内容が頭に入っていない。保育園組はあいかわらず騒いでいる。昼間は子ども部屋である寝室に行き、シヨンの隣に重たい体を転がす。シヨンとサクは父親が入ってきた瞬間に寝たふりを始める。保育園組が寝るのが先か、父親が寝てしまうのが先か。勝負の結果は引き分けだっただろう。目を覚ますと、シヨンの寝息が聞こえる。より重たく。重たいというよりスライム状になったかのような体をドロドロと引きずって、洗濯機に寄り掛かる。洗濯物を取り出し床にぶちまけると、座り込んでハンガーにかけていく。大脳はまったく機能しておらず、脊髄反射だけで洗濯物を処理しているかのようだ。洗濯物を干し終わると、時計の針は午後11時を示している。いつもなら、もう1時間は何かをしているところだが、今日はそのまま布団に倒れこむ。スライムは溶けて液体になってゆく。

今日も暑い。いつもなら夜間に干して朝に取り込む洗濯物を、そのままベランダに放置する。たまには日光に当ててやろう。昨日の絶不調は今日の絶不調で上書きされる。頭も体も重たい。何もしたくない。けれども三姉妹の父親に休みはない。自分も含めて4人分のトーストを焼く。子どもたちに1枚食べられるか、半分でよいのか確認しながら。冷蔵庫の中のハムを均等に配布する。大きさのバランスを誤れば、即座にクレームがつく。三姉妹は不公平に対して決して妥協を許さない。食後には長女ヒマと三女サクに菓を飲ませる。サクは時折激しく咳き込む以外は元気そう。ヒマは結局またトーストを一口食べて残してしまった。2日前からほとんど何も食べていない。なんとかアクエリアスだけでも飲ませる。三連休の中日、病院は空いていない。食事を終えて、横になる。子どもたちがこの調子ではどこにも出かけられないし、明後日からまた動き出せるように、自分も体調を回復しなければならない。シヨンとサクは小動物のようにチョロチョロと動きまわり、かつて母親が入室を厳しく制限していた通称「大人部屋」へ何の躊躇もなく入ってくる。父親が入室制限をしていないことを知っている。オフィスチェアや手動発電式の懐中電灯で遊んで、飽きたら出て行く。今度は台所で遊んでいるようだ。引き出しにしまっておいた箸が落ちる音がする。父親は気にしない。精神をチューンナップして、細かいことを気にしない性格を意図的に引き出している。一度でも警告を口にするとチューニングがズレて、そのまま叱り飛ばすモードに達するのは分かっている。

子どもが悪い行動をした時に、本当に悪いことかどうかを考える。いったん、ダメだと言ってしまうと、ダメだと言ったことに対して言うことを聞かないことに腹が立ってくる。そうすると、ももとの行動とは関係なく、ただ腹が立つので怒るという現象が生じる。ここでフォーカスすべきは子どもの行動であり、言うことを聞くかどうかはまた別の議論だ。そもそも、その行動は本当に悪いことだろうか、単に親が面倒くさいから良くないと言っているだけではないか。はさみで遊んで紙くずを散らかすのは、悪いことではない。散らかったら片付ければよい。散らかすなと叱りつけ、はさみを取り上げるのは、子どもにとっては成長の機会損失だ。子どもは好奇心旺盛で何でもしたがる。ダメだダメだと言いつつ続けると、大人になっても自分で自分に制限をかけてしまうことになると思う。とは言っても、液体をこぼしたり何かを壊したり、面倒くさい局面に出くわすことは多い。思わずカッとなりそうになるが、三姉妹の父親はここで6秒間黙る。6秒で怒りのボルテージは急速に低下する。原因は何だ。不注意か、ふざけていたのか。ゴールを設定しよう。大抵の場合は同じ過ちを繰り返さないこと、となる。それを前提に対処を考える、もちろん厳しい口調で注意することもある。特に近隣の住人に迷惑がかかる場合は、厳しい対応になることが多いように思う。迷惑をかけないように生きようとすると、それなりの人生にしかならないと考えているので、人に迷惑をかけるなとは言わない。ただ、明らかに誰も得をしないであろう迷惑をかけるべきではない。ゴールに向かう。次からは気を付けろと。しかし、ここで期待してはいけない。子どもは同じことを再び繰り返す。そうしたら、また同じように対処する。仏の顔も三度までと言うが、親は仏よりも寛容であるべきだと思う。何度でも付き合おう。まあ

、仏と違って1度目でキレルこともあるけれど。

寝たり起きたりを繰り返しているうちに、昼食の時間になる。体調が悪くて、食事の用意をするのがつらい。こういう時は遠慮せずに外食にすべきだろうが、ヒマの高熱が続いていて外に連れ出せない。実家からもらったレトルトのカレーとナンがあるのを思い出す。レンジとトースターのダイヤルを回すだけで調理できる。時間の経過とともに、調子が悪くなっていくのを感じる。そう言えば、昨日の夜は運転するために薬の服用を後回しにして、結局飲まずに寝てしまった。朝もいつもの癖で、飲み忘れていた。精神科医にとってミヤザキシニヤは良い患者ではないだろう。薬の量を自分で勝手に調節してしまう。もっとも、量を増やすことはないから、その点では安心だ。薬箱には、もっぱら余った薬が溜まっていく。薬を飲んだ後の、ふわふわとした感じ。決して不快ではない、むしろ心地よさを感じることもある。しかし、集中して何かに取り組もうという時には邪魔になることもしばしばだ。特に朝には戦略的に薬を飲み忘れるということをや。強烈な眠気が襲ってくることもある。ただし、薬を飲んでいなくても起こることを考えると、必ずしも薬の影響とは言えないだろう。先月中頃、つまり離婚話が佳境に差し掛かってからは、日中の眠気が強くなったのを感じる。心療内科ではストレスによるものと診断されている。一方、非戦略的に薬を飲み忘れた時は厄介だ。薬の血中濃度が下がり、おそらく離脱作用と呼ばれるものが発生する。脳の中に不快感の染みが広がっていき、思考能力が低下するとともに、体調も悪化していく。これは相当につらい。手元に薬があればよいのだが、持ち歩かずに外出している時にはどうしようもない。ひたすら我慢することになる。それでも、薬自体の量は少ないし、統合失調症だと診断されていたあの頃に比べると症状は無いに等しい。下を見るのもどうかと指摘されるが、世の中にはもっとつらい病に苦しむ人がいる。薬さえ飲んでいれば何ともないのだから、眼鏡をかけているのと変わらない。ちょっと不便だけれど、慣れると不便さは軽減される。むしろ、メリットもある。完全に健康な人に比べて、自分の調子の変化を気かけ敏感に察知する。調子が悪い時には、待てをかける。もっとも、あいかわらず休むのが苦手なので、結局無理をしてしまうところは改善しなければならないのだけれど。

昼食を済ますと、再び横になる。夢と現の境界を行ったり来たりしながら、それでも何回目かに現実世界に戻ってきたとき、ガッと体を起こして無理やり動き始める。中型のバイクに乗っていた時期がある。バイクはガソリンが無くなった時に、つまみをひねると隠し燃料が使われるようになっている。今、心のつまみをひねった。残っていた気力エネルギーを体に充満させる。走りだせばバッテリーが充電されるのもバイクと同じだ。ガソリンはおやつでも食べて充填しよう。三姉妹を巻き込んで、家中に掃除機をかける。掃除機をかけるチャンスは休日しかない。洗濯物を取り込んでたたむと、再び三姉妹を動かして片付けさせる。風呂の掃除やキッチンの掃除が残っているが、それはガソリン満タンの日にやることにする。部屋で読書をしていると、シヨンとサクがかわるがわるやってきては3時はまだかと尋ねる。はやく3時にしてくれと依頼される。仏を超える存在である父親であっても、時間を操作するのは不可能に思える。しかし、ミヤザキシニヤは知っている。時間を操作する方法を。アインシュタインは相対性理論を理解してもらった

めに短い論文を発表している。かわいい女性といるときは1時間が1分に思えるが、熱いストーブの上に1分間座らされたら何時間にも思える。これが相対性だと。すなわち、観測者の精神状態は時間を知覚するうえで決定的な役割を果たす。子どもたちに楽しい遊びを提供すれば、3時までの時間を短縮して知覚させることが可能なのだ。と考えたところで、自らのガス欠の問題を解決できない父親は、ただ、もう少し待てと言うことしかできないでいる。3時になり、大好きなアイスを食べておとなしくなる姉妹を置いて、父親はまた自分の世界に戻っていく。

買い物に出かける。また1週間分の食料を調達しなければならない。適当にメニューをでっち上げて、必要な材料を買い込む。煮物を作るスキルが著しく不足しているが、クックパッドで簡単に作れる方法を探すとする。今週は先週と同じ材料で味違いという、ドラクエの敵キャラ的戦略をとることにする。はやく料理のレベルを上げなければ。今日の夕飯には、鮭を焼いて、味噌汁と一緒に出す。野菜が足りないので、味噌汁にダイコンとニンジンをもめに入れる。夜のルーチンワークもスムーズになってきた。パイプライン処理的に食器を洗い、夕飯前に入浴を済ませている子どもたちに歯を磨かせて寝室に送り込む。シャワーを浴びて、いつもなら洗濯機を回すところだが、今日はガス欠により明日に先延ばしする。明日できることは明日しよう。明日にはやなくてよくなっているかもしれないから。寝室で横になり、子どものリクエストでまた昔の話をする。転勤族で小学校を3つ、中学校を2つ通った話など。そう言えば、オフィスでその話をした時に、生まれながらのノマドだと言われたのを思い出す。ミヤザキシンヤは場所にこだわらない。すでに何度も引っ越しを経験している三姉妹も、引っ越して新しい場所に行くのは楽しいと言う。生まれながらのノマド一家は、どこででも暮らしていける。なぜかしら安心感を覚えた。

2週連続三連休の2週目。最終日。昨日の体調からは復帰が難しいと思っていたが、今日は体が動く。6時から6時半頃に起きて、最初のうちこそグダグダしていたが、次第に頭も体も動き出す。三姉妹とともに朝食をとり、「あまちゃん」が始まる頃にはエンジンがかかっている。あまちゃんファン感謝祭は、趣旨を理解したところでそっとテレビの電源を切る。午前中は日記を書いたり本を読んだりして過ごす。連休中は「体験」をテーマにどこかに連れて行こうと考えていたが、長女ヒマの体調が良くないので外出はできない。日記を書いていると、ふと昨夜のことを思い出す。三姉妹は父親の子どもの頃の話を書きたがる。ヒマは小学校の頃の話、シヨンとサクは幼稚園の頃の話、自分と同じくらいの時のことを聞きたいようだ。それ以降のことになるとリクエストしようにも想像できないからかもしれないけれど。小学校の話になった時に、ふと懇談会のことを思い出し、ヒマに「担任の先生、いい先生だね」と言う。すると「先生がパパのことかっこいいって言ってたよ」と返ってきて驚く。懇談会ではお母さん方に囲まれて父親の出席はひとりだけだった。それでも、一对一の会話が苦手にもかかわらず人前で話をするのが好きなミヤザキシんヤは、調子に乗って発言をする。そのことを、かっこいいと言われているのだとすぐに気がつく。ヒマは人前に出るのが得意ではない。それでも授業参観の時には、みんなの前でしっかりと発表をしていた。ここは、再度ヒマを褒めるタイミングだった。と、今になって気がつく。夜、子どもに話をするときに教訓を入れないようにしている。父親の常識は子どもの非常識。子どもは親とは違う時代を生きる。父親の時代の教訓のいったいどれくらいが有益だろうか。それよりも、有害な教訓の方が多いのではないかと考えたりもする。

親の言葉というのは影響力が大きい。ミヤザキシんヤの母親は息子を息子の好奇心を育てるために、あれは何だろう、これはどうなっているのだろう、と疑問を提起し続けた。その結果、息子は科学少年になり、人体や生物や宇宙に興味を抱くようになる。本は無条件に買ってもらえる。時間は知的好奇心を満たすために存在した。好奇心旺盛で、それを満たすために行動する、今でも変わっていない。レゴブロックもたくさん買ってもらった。吐くまで何か作っていた。今でも吐くまでプログラムを書いては何かを作っている。子どもの頃と何ら変わらない。今のミヤザキシんヤは、母親の影響を大いに受けているということを認めざるをえない。一方で、母親はひとつのミスを犯した。熊本の年配の人間は熊本大学を異常に高く評価している。ミヤザキシんヤの母親もそんな人間のひとりだった。彼女は小学生の息子にたびたび、熊本大学に行けたらいいね、という話をした。結果、息子は熊本大学に進学することになる。しかし、高校時代の模試では常にA判定。担任の先生はもっとランクの高い大学を受検することを勧めた。だが、ミヤザキシんヤの中には熊本大学以外の選択肢はなかった。母親の言葉は息子の将来に上限を設定してしまった。本人は何の後悔もしていないので問題はないけれど。そして父親になったミヤザキシんヤは、娘たちに何々できたらいいね、という上限を設定する言葉をかけないよう気を遣っている。最近では、海外に行けと下限を設定するようにしている。現在の小学生の65%が今はまだ存在していない職業に着くとも言われている。実際のところ、ミヤザキシんヤの職業というの、小

学生の頃には一般的には存在していなかっただろう。親の現在の価値観で子どもの将来に影響を与える勇氣はない。ただ、多様性を受け入れるということだけを伝えるしかない。それを最も効果的に体得できるのが、海外に出ることなのではないかという完全なる妄想を元に、子どもたちに海外に行けと言う父親。その父親はようやく初めてパスポートを申請しようというところだ。無責任なことこの上ない。

1週間分の食料は買い込んである。しかし、連休中の昼食についてはまったくの無計画だ。レトルト食品の引き出しを開ける。ラーメンを発見。鍋の水を火にかけながら、多少なりとも栄養をと思い、ニンジンのスライスする。ニンジン入りとんこつラーメン。夕飯は作りたくない。スシが食べたい。でも、激しく咳き込むヒマを連れて行くわけにはいかない。冷蔵庫に昨日の味噌汁と焼き魚の残りが入っていることに気付く。今日は、これでなんとかしよう。食事の問題が解決して、しばらく自由時間になる。三連休、どこにも行けなかったのは悲しすぎる。ヒマは咳が激しいものの、元気はある。ダンボールを使った家づくりワークショップを開催することにした。引っ越していった妻から事前にダンボール箱を4つもらっている。広い家にしたいという三姉妹。家の広さはどれくらいが妥当かという議論に持ち込む父親。父親は家を買わない主義だ。どうせ家賃を払い続けるならば、ローンの返済で最終的に家が残ったほうがよいというのが持ち家派の意見だと思う。しかし、持ち家では土地に固定される。生まれながらのノマドは、好きなときに好きなところへ行けないことを大きなデメリットだと感じる。賃貸であれば借り換えができる。それに、何十年もローンを組んで、その間収入が途絶えない保証なんてあるのだろうか。そんなことを考え、家を買わないことにしている。しかも、賃貸も最小限度の広さで構わない。4人家族になったことで、今の家も若干広すぎるように感じる。ダンボールで家を作るにしても、必要だと思われるサイズで作ればよい。狭ければ、いったん分解して広い家に建て替えばいいのだ。かくして、子ども3人が入れるダンボールハウスが完成する。ドアノブも開閉式の窓も取り付け。無地の面を外側にしてある。マーカーを渡すと、思い思いに落書きをする。「3人のいえ」「子ども100とうばんのいえ」と書かれていて、気が効いている。新居で遊ぶ三姉妹。ここで大発見をする。ダンボールハウスは暖かい。今の時期だと暑すぎるくらいだ。冬でも暖房器具がいらないかもしれない。そして、もうひとつ。ダンボールハウスの外は家の中だ。家の外で遊べないヒマが家の外、つまり外側の家の中だが、で遊ぶことができる。発想の転換だ。

今日は体が動く。掃除でもしようと、掃除用具を買いに行く。もうじき手放す予定の車を運転しながら、車がない生活を脳内でシミュレートする。今の家に住んでいる限りは大丈夫そうだ。と言っても、家賃の安いところに引っ越すことも検討しているが。自家用車の維持費と、タクシーやレンタカーの費用を天秤にかける。発想を転換するなら、車に住む。普通に考えると、やはり自家用車は所有しない方がよさそうな気がする。帰宅して借り物の家の掃除をしようと、まずは子ども部屋の押し入れをのぞく。2つセットで買った学習機の、まだ組み立てていない片方が放置されている。今日は体が動く。予定を変更して、机を組み立てることにする。パーツがやたら多い。ヒマが寄ってきて手伝わせてくれと要請してくる。大量のネジの中から目的のネジを探し

だす係にする。安物の机は材質がイマイチで、ネジも回しにくい。すぐにマメができる。家を立てるよりも机を組み立てるほうが大変だとは予想していなかった。子どもたちは途中で飽きてテレビを見に行ってしまう。もくもくと作業を進め、3時間以上かかって完成した時には夕飯の支度をする時間になっている。ヒマとシヨンに向かって風呂に入るよう指示を出しつつ、昨日の残りのご飯、味噌汁、焼き鮭を温める。機嫌の悪いサクと一緒にシャワーを浴びる。子どもを風呂に入れるのは久しぶりの気がする。ちゃんと洗えていなくて、少し臭っていた。風呂からあがると、三姉妹には納豆を付けて夕飯にする。子どもたちは年の順に食べ終わる。食器は随時パイプライン処理的に洗っていく。今日は夕飯前に入浴が済んでいるので、洗濯機も回す。家事を早め早めに済ませることで、夜の時間を確保するというのが最近の戦略だ。保育園組を寝かせ、ヒマにアイロンの準備をさせる。ハンカチにアイロンをかけるヒマを見守るが、もう心配する必要はなさそうだ。小学校の給食エプロンだけは、複雑な形状をしているので父親がアイロンをかける。この形状にアイロンを掛ける方法など父親にも分からないのだけれど。

マンガを読んでいるヒマを置いて、近くのコンビニまでチョコレートを買に行くことにする。食べたいわけではない。むしろ、体は食べ物を受け付けない。しかし、脳がチョコレートを食べるとささやいている。コンビニでグラム当たりの単価が一番安いチョコレートを買う。ピーナッツが入っている。体は拒否反応を示している。だが、脳はそれにしろと指示を出す。外出していたのはほんの数分だったが、帰宅すると珍しく保育園組がおとなしくなっている。ヒマが寝るのを見計らって、チョコレートを食べる。やはり重い。けれども、脳はミヤザキシンの左手を操作して袋と口の間を往復させ続ける。脳が左手を操作している際に、右手で読書をする。ウィキリークスに関するレポートを読み終わると、今度は左手で「子育てハッピーアドバイス」を一気に3冊読む。右手にはペンを握り、A4の用紙3枚分のメモをとる。意外と実践できていることも多いと感じる。野生を失ったミヤザキシンの脳は無自覚に大脳新皮質を多用する。野生生活には向かないかもしれないが、人間の子育てには有利なようだ。3冊をひとことでまとめると、子どもの自己評価を下げないようにする、ということだと認識する。すべての項目が、それにつながっているように見える。断片的には実践できていると思っけていても、そのひとことを意識しているかどうかで行動は変わるだろう。いい子に育てようとか、優秀に育てようという気はまったくない。おおむね幸せだと認識できるなら、それでいいんじゃないか。親の影響力は大きい。その一方で、親にできることはそれほど多くはないと感じている。

iPhoneのアラームで目を覚ます。朝6時。平日は日記を書く時間が限られる。子どもたちが起きる前に書いておきたい。眠たい。日記を書くために生きているわけではないから、無理して起きる必要はない。今はエンジンをかけるために日記を書いている。おそらく来月には必要なくなるだろう。そうして朝6時に起きるという習慣だけが残れば、この時間に仕事もできるし読書もできる。気分や体調が優れなければ、散歩をしてもいいだろう。海が近い。時々、カメラをぶら下げて、河口に向かって歩いていく。普段のカメラは家族の写真しか写さないが、このときは水鳥だったり、湾の向こう側に浮かぶ海上都市のような町並みを写す。潮の香りもしなければ、波の音も大きくはない。頭上には都市高が走り、静かで広大な海とは違っている。でも、ミヤザキシヤはこの景色が好きだ。自然と人工物が危ういバランスを保っている。丁度良い気候だし散歩に行けばリフレッシュできるだろうとも考えるが、今月は朝から日記を書いてエンジンをかけることにしている。起きてすぐには頭は働かない。うつらうつらして、書き始めるのは6時半を過ぎる。この頃には早起きなヒマが起きて朝食をとっている。そしてあっという間に保育園組を起こす時間になる。シヨンとサクは、気づくと自分で起きてマンガを読んでいることもあるが、わりと激し目に起こさなければ起きない日もある。今日はすでに起きている。トースターと電子ケトルと電子レンジのスイッチを次々に入れていく。朝の準備は楽なものだ。 β デンプンを加熱して α デンプンに変える処理は家電が全部やってくれる。トースターが焼いてくれたパンにマーガリンを塗り、シヨンとサクに渡す。電子ケトルが沸かしてくれたお湯をカップに注ぎコーヒーを淹れる。電子レンジは冷ご飯を温めてくれる。それを弁当箱に詰め、少し冷ます。ついでに冷蔵庫が冷やしてくれた麦茶を水筒に入れる。人間である父親がすることは、保育園組が遊ばず速やかに朝食を済ますのを監視するだけだ。トーストを食べ終わると、昨日作ったダンボールハウスの中で着替えをする保育園組。その間、8時までには日記の続きを書く。「あまちゃん」を見終えたら、父親も着替えて保育園に向かう。

自宅は保育園と地下鉄の駅の間位置する。保育園から自転車を漕いで家の前につけると、そこから徒歩で駅に向かう。これが最も効率のよい移動方法だ。ICチップ入りの定期券を改札にかざすと、来月頭には有効期限が切れることが表示される。交通費は支給されていない。家計の状況を考慮して、次は定期券を更新せずに自転車通勤に切り替えようかと検討している。家も住宅手当が出ることを前提に借りているため、手当が出ていない状況では家賃が高い。ヒマの歯の矯正に月3万円かかっていることもあり、赤字が続いている。そもそも支払っている住民税も少なく、給食費は無料、学用品購入の援助も受けているくらいの収入だ。それならば、転職するなりフリーランスに戻るなりすればよいと傍からは見られるかもしれない。それでも、ここで実績を出すのだと、友人からはストイックすぎると評されるミヤザキシヤは決めている。この決意で周りの人に迷惑をかけているわけだが、もはや何が正しいのかは分からない。ミヤザキシヤの世界での正しさは、別の世界での正しさではなく、それぞれの世界は認識を変えることで行き来できる。正しさとは絶対ではなく、自己の認識によって変化するものなのだ。三姉妹の母親も

彼女の世界では正しかった。必要なのは、世界が多層構造をしていることを認識することと、多様性を受け入れるということだ。ミヤザキシンヤには世界を飛び越えるフットワークがまだ足りないように見える。

オフィスでは個人的な10月からの本格復帰に向けて準備を進めている。手入れをしないと荒れ放題になるタスクの整理、9月末で安定版となるリリースの準備、動き始めたiPhoneアプリ開発の打ち合わせ。家事や育児はリズムが掴めてきている。今月を乗り越えれば大丈夫だろう。朝と夜に時間を確保することもできそうだ。あとは、体調がもう少し良くなればと思う。どこかでストレスを発散させなければならぬのだろうか。イタリア帰りの鹿似のプログラマーからイタリアの写真を見せてもらいながら、旅行に行くのもいいかもしれないと考える。車を所有しているうちに、どこかに行こうか。でも、そんな余裕はあるだろうか。何かを作るのが好きだから、WebサービスやiPhoneアプリを作るのも気分転換になるかもしれない。今週末には3日間、30時間で好きなものを作り続けるというイベントが開催され、福岡市も協賛している。土曜日は保育園の運動会があるが、その後にこのイベントに参加してみるのもよさそうだ。子連れでも大丈夫だろうか。疲労を軽減するために、デジタルではなくアナログで作る方がいいかもしれない。と言っても、デジタルに侵され、バーチャルな世界に生きるミヤザキシンヤにはアナログの製作物などなにひとつ思いつかないけれど。とにかく10月に本格復帰するのであれば、ストレスを発散するチャンスは今週末しかない。と同時に、思う。一気になんとかしようとするのではなく、日々ガス抜きができる環境を整えることも大切だと。

今週は定期バージョンアップなので、今週のタスクを来週には回せない。と自分で自分に不必要な制約を設けている。ギリギリまで粘り、いつもよりもやや遅くオフィスを後にすると、保育園へお迎えに向かう。園庭で遊びたがる子どもたちに、お寿司を食べに行くから早く帰ろうと提案する。寿司の破壊力は絶大だ。子どもたちの遊びたい衝動をみごとに打ち砕いてくれる。本当は三連休中に食べに行くはずだったが、ヒマとサクの体調が回復しないので先延ばしにしていた。今日こそは、夕飯も作りたくないし、寿司を食べに行こう。もちろん、回転寿司だけれど。ヒマには帰宅したらLINEのメッセージで知らせるように言っているので、すでに帰宅済みなのは把握している。家に帰ると急いで用意をして、回転寿司屋に向かう。大好きな寿司を前に大はしゃぎの三姉妹。くら寿司は、全皿わさび抜き、注文した寿司の新幹線での配達、皿を5枚入れると始まる景品が当たるくじ、すべてが子ども仕様になっている。個人的にはスシロー派だが、子連れの時にはくら寿司もいいなと思う。寿司は心の栄養だ。満足して家に帰る。三姉妹にはさらに良いことが待っている。イタリア帰りの鹿似のプログラマーからのお土産のチョコレートだ。お礼の手紙を書かせる。三連休にはどこにも行けなかったけれど、これで満足してくれただろうか。

寿司を好きなだけ食べて、それでも2千円で収まったが、眠くなってくる。子どもたちを風呂に入れて寝かすと、思わず自分も横になりたくなる。そこをこらえて、MacBookを広げて仕事の続きをする。先週からの課題だった画面の高速化が完了する。就寝時刻まではまだ時間がある。「忙

しいパパのための子育てハッピーアドバイス」を広げる。無印の「子育てハッピーアドバイス」は実践できていることも多いと感じたが、「忙しいパパのための」は完全に悪い見本が当てはまっている。ただ、良い見本はあまりに理想的すぎて理不尽さに憤りも覚える。夫婦だけでの育児には限界があるのかもしれない。Facebookのタイムラインを眺めていると、ちょうど大阪二児置き去り死亡事件に関する記事が流れている。母親だけが悪いわけではない。これは社会の問題だ。社会と表現すると、あまりに匿名性が高すぎて、誰も自分ごととして捉えない危険性がある。ミヤザキシんやがシングルファーザーとしてこの問題に片足を踏み入れた人間だ。何かできることがあるのではないかと漠然と考える。何かを作りたいという欲と化学反応を起こすと、ちょっとした生成物ができあがりそうな気もする。最近子どもたちのために時間を使うことが増えたからだろうか、食欲も含めて自分のために何かしようという欲が減衰している気がする。今はまだエネルギーが足りないけれど、もう少ししたら社会とか地球のために活動するのもいいかもしれない。もちろん、普段の仕事も社会問題に結びつけて。何だか分からないけれど、何かしようと思う。

運動会が近い。天気の良い日が続いていて、いかにも運動会シーズンという感じがする。6時に起きて、また夢と現の境を行き来する。7時までの限りある貴重な資源だ。寝て過ごすにはあまりに惜しい。もともと朝方の人間で、早起きは得意だった。一時期、仕事が忙しすぎて無茶な生活を送っていたら、遅く寝るのが癖になってしまった。最近は、日付が変わる前に布団に入っているが、朝から疲れが溜まっている。運動不足も原因のひとつだろう。体を動かしたい。しばらくすると、ヒマが起きてくる。「名探偵コナン」を1巻からずっと読んでいて、もう70巻を超えている。小学2年生がどれくらい理解しているのかは分からない。暇さえあればマンガを読んでいることの是非も分からないけれど、少なくとも集中力はあると判断しても良さそうな気がするし、活字離れが進行することもないだろう。読むものが偏らないように、次の休みには図書館に行って本を借りてこようと思う。そのうち、シヨンとサクも起きてくる。シヨンもこのところマンガばかり読んでいる。シヨンが読んでいるのは「ドラゴンボール」で、これなら保育園児でも楽しめそうな気がする。サクは今のところマンガに強い興味を示さない。シヨンとサクは年子で1歳も離れていない。体格も近く、よく双子に間違えられる。しかし、観察していると、やはり1年の成長の差は大きい。文字の読み書きについては、圧倒的な差がある。駄々をこねたときに厄介なのは姉のシヨンの方なのだけだ。

保育園は中運動会という運動会の予行練習が行われるため、本番当日と同じ8時40分までに登園して準備を済ませておかなければならない。体操服を来て登園するのだが、体操服がないと泣き出すサク。家になければ保育園にあるからとなだめて、急いで連れて行く。急いでいる時には、自転車に2つ子どもも乗せがあると便利だと思う。しかし、価格の安さだけで選んだ自転車は、ひとつの子の乗せを搭載する耐久性さえない。放っておくと道端の草で遊び始める姉妹を、まっすぐ保育園に向かうよう誘導する。父親は大人の都合で子どもを急がせることに違和感を感じている。早くしなさい。急ぎなさい。三姉妹の母親の口癖であったし、保育園でもよく聞こえてくる。でも、子どもは子どもの時間で生きているのであって、大人の都合に合わせるのは違う気がする。それでも今日は運動会の予行練習で登園時間が決まっている。これは子どもの都合だ。遠慮なく急がせる。登園時刻が指定されていたため、靴箱付近には近づけないほど人が多い。横から回って上がり込む。いつもの朝のルーチンワークに、子どもを体操服に着替えさせるというタスクを加える。体操服がないと騒いでいたサクの体操服は、結局、リュックの中から見つかる。バタバタと着替えて、先生に挨拶に行く頃には指定時刻を5分ほど超えている。当日は遅刻しないように気をつけなければ。小学校も運動会の予行練習があるらしい。保育園側から見える運動場に準備されている大玉を横目に見ながら、自転車を走らせる。地下鉄の定期券を更新しなければ、このまま自転車でオフィスまで移動することになる。気候的にはちょうど良い。運動不足も解消できて一石二鳥である気がしてくる。

オフィスではいつものように栄養ドリンクを飲み干して、仕事モードに入る。今朝は朝から薬を

飲んでいるためか、若干シャキッとしない感じがする。月に1回の定期バージョンアップ。2日早めて今日中にやっつけてしまおうかと考えていたが、予期せぬタスクが入ってきたため明日に延期することにする。このバージョンアップが終われば、いよいよ新しいプロジェクトがスタートすることになる。9月中に生活のリズムを整えて10月から仕事に本格復帰という計画とタイミング的には丁度良い。ただ、休暇を取って体調を戻したいという希望はあいかわらず持っている。これも、タイミング的には今だという気がする。昼にフルーツグラノーラ、これも良くないのかもしれないけれど、を食べてソファーにもたれかかると、そのまま意識が遠のく。仮眠をとるのが苦手なのにもかかわらず寝てしまうのは、かなり疲れが溜まっているのだろうか。それでも、精神的には追い詰められている感じはないように思う。

雨が降ってくる。傘を持ってきていない。それよりも、ヒマに傘を持たせてないことが気になる。下校時刻には止んで欲しいと、ただただ願う。バタフライ効果を引き合いにだしたとしても個人の思考が気象に影響を与えるとは考えにくいので、願いが通じたわけではないだろう。それでも、雨が止む。また降り出したら保育園へのお迎えにも影響がある。早めにオフィスを後にする。保育園に迎えに行くと、帰宅組はみんなでテレビを観ている。教室に入ると、先生がションとサクを呼ぶ。そして先生にご挨拶をしてから帰るのだが、最初の頃に比べると、声もお辞儀の角度も格段に大きくなっている。とくに注意されているわけでもないのに、自然と上達していることに不思議な気持ちを抱く。でも、ションが先生から目を離さずに顔を上げたままお辞儀をするのがおかしくて、いつも笑ってしまう。帰りがけにまた雨が降ってくる。次第に激しさを増す。急いで帰ろうと先を急ぐ父親の後ろを、子ども達はハンカチで遊びながら歩いている。いつから雨に濡れるのを嫌うようになったのだろうか。自転車を止めて、雨粒が体に当たるのをじっくりと感じる。ちょっと寒い。

冷蔵庫のニンジンがしなびている。豆腐の賞味期限を確認すると、急遽夕飯のメニューを麻婆豆腐からハヤシライスに変更する。冷蔵庫からハヤシライスのルーを取り出すと、中身が半分しか入っていない。今度は、ハヤシライスからカレーライスに変更する。肉を解凍している間に野菜を切って圧力鍋に放り込む。解凍された肉と水を入れて火にかける。料理経験がほとんどないミヤザキシンヤでも、圧力鍋と魔法のフライパンがあれば、それっぽい食卓を演出することができる。圧力鍋が頑張ってくれている間に三姉妹を風呂に入れる。その間にヒマの宿題の丸つけをする。父親に比べると、ずいぶん字がきれいだ。それだけに、手を抜いたところはすぐに分かる。カレーのルーを溶かして、冷蔵庫で β 化したご飯をレンジで α 化する。保存していたご飯だけでは足りず、実家からもらっていたナンを分け合う。今日がカレーで良かった。塞翁が馬。シンクロシティと言うところだろうか、実家から電話がかかってくる。母は元気そうな孫の様子に安心しているだろうか。いや、心配性の母だ。油断はできない。今度会ったら、大丈夫だということ全力で伝えよう。

最近一番頭を悩ませているのは、保育園組が夜寝ないことだ。寝ないことが問題なのではない。

寝ないことを叱るべきかどうか、どうにも判断がつかない。保育園は幼稚園と違って昼寝の時間がある。シヨンとサクはすでに昼寝を卒業しているにもかかわらず保育園で昼寝をするためだろうか、夜になって寝室に行ってももまったく寝ようとしなない。放任主義的な父親としてのミヤザキシンヤは、寝ないなら寝るまで待とうホトトギスなのだが、寝る時間には寝るというルールを守らせるという使命感も持っている。そんなルールは必要ないという思いと、あえてルールを作ってそれを通して教育すべきという思いが対立し合っている。親の常識は子の世代の常識ではないとしても、規則正しく睡眠をとるというのは普遍的であることのように思う。とすると、就寝時刻にはおとなしく寝るというしつけをすべきか。父親と一緒に横になると、子どもたちはおとなしくなる。毎日それを繰り返すといいのだろうか。小学2年生のヒマはおとなしく寝ている。時間が解決しそうな気がする。ここで怒鳴って黙らせるのは、ミヤザキシンヤのポリシーに反する。やはり、子どもたちの隣にいるということが大切なのだろう。心理的には意外と追われている感はないのだが毎日時間に追われているし、それに人生は有限だけれど、子どもたちが幼い時間もまた有限だ。世間の言うように、手が離れていったら寂しいものかもしれない。今はゆっくり三姉妹につきあうとしよう。自室と寝室を往復しているうちに、夜はしだいに静かになっていく。

暑いのだか寒いのだか、よく分からない。過ごしやすいといえば過ごしやすいけれど、それは適切な服装をしていればの話だ。学生時代は冬休みまで半袖で過ごしていたミヤザキシンは、季節感など持ち合わせていない。何を着るのか、それよりも三姉妹に何を着せるのか。それが問題だ。よく分からないので、子どもたちに任せることにする。季節感のない父親のDNAを受け継ぐ三姉妹は、そろってノースリーブを選ぶ。さすがに、明日からは袖がある服を着るよう指示する。ヒマはまだ咳が治まっていない。ノースリーブを着て咳をしているヒマを見て、ソフトクリームを食べながら咳をする時の羞恥心に似た感覚を覚える。ヒマの咳はいつまで経っても治まらない。学校からは警告が出ている。小児科に連れて行くことにする。その前にシヨンとサクを保育園に送り届けたところで、毎日必要なタオルを忘れたことに気付く。保育園の準備は基本的に子どもたちに任せているが、昨日は子どもたちが寝た後のこっそりチェックを怠っていた。姉妹を先生に引き渡し、急いでタオルを取りに帰る。保育園に戻ると、園児たちが園庭で遊びまわっている。シヨンとサクの姿を探すが見つからない。タオルを所定の位置に置いて、園庭を見渡しながら保育園を後にする。次は、ヒマを連れて小児科だ。外を歩くと、日向と日陰の寒暖の差が激しい。いかにも体調を崩しそうな気候だ。実家から離れて暮らすシングルファーザーが体調を崩したら相当に大変なことになると、その時の様子をシミュレートをしながら歩く。繋いだ手が温かい。

小児科では前回とほぼ同じ薬を処方される。ここからだ地下鉄の駅の方が近いのだが、遅刻する場合は保護者同伴で登校しなければならないというルールがあるらしい。区役所や警察署が並ぶ比較的広い道の街路樹の下を2人で歩く。歩道にはたくさんの実が潰れている。街路樹はイチヨウだった。実がなっているところが見れないか、見上げながら歩いてゆく。びっしりと実がなった木を見つけてヒマに知らせる。いい反応だ。春には花を、夏にはセミを、おもしろい形の雲、川の水の量、父親は歩きながら興味を引きそうなものを常に探して、それを子どもたちと共有している。些細なことに感動できるようになって欲しい。そう願いながら。小学校でヒマと別れて、もと来た道を帰る。さすがにこの時間になると地下鉄は空いている。それでも7人がけのシートに7人座るのが窮屈に感じられて、ドアの脇に立つと手すりにつかまる。車両の中を見渡すと、ほとんどの人がスマートフォンをいじっている。年配の方がこれをデジタル化の弊害だと言ったけれど、10年ほど前はスマートフォンの代わりに、スーツを着たサラリーマンでさえも、マンガを読んでいた。結局、地下鉄の車両の中というのはパブリックな個室なのだ。地下鉄を降りてホームを歩きながら窓越しに車両の中の様子をうかがう。誰もが個室に閉じこもり思い思いの時間を過ごしている。地上に出てオフィスに向かう。すれ違う人が時折こちらをチラリと見てすぐに目をそらす。モバイル可能なパブリックな個室には明確な壁は存在しないけれども、他人の個室に侵入しないことが暗黙の了解となっている。個室で問題が生じて助けを求めるときには、声を大きくして叫ばなければならない。現在の日本には、助けを求めることもできずに孤独死を遂げる人々がいかに多いことか。自分はどうかと考える。助けを求めることができるだろうか

。明日はシステムの定期バージョンアップの日だ。過去のタスクを掘り起こし、漏れがないかチェックする。予期せぬ不具合が見つかって、早急に対処する。昼のフルーツグラノーラ、そろそろ飽きてきた、をはさんでバージョンアップの準備を続ける。時折、同僚とやり取りをする。テキストチャットで済ませられるやり取りではある。しかし、なぜだか対面でのやり取りに価値があるような気がする。完全に家に引きこもっても仕事ができる職種ではあるけれどもオフィスへ出てくることにこだわっているのは、そのよく分からない価値がなくてはならないもののように感じるからだ。一方でバージョンアップは孤独な作業となる。今日の夜間に作業を行うことを告げて早めにオフィスを出る。少し早すぎるので本屋のIT関連フロアへ向かう。本屋は未知で溢れている。最近技術書を読んでいない。過去の資産とネットで得た知識だけで仕事をしている。未知と未知とで挟まれた通路を歩いていると不安が大きくなっていくのを感じる。たぶんミヤザキシンヤは生涯現役ではない。どこかで歩む方向を変えなければならない。デザイン書のコーナーに向かう。未知の濃度が高くなる。デザイナーに転身するつもりはない。ただ、技術書コーナーの隣にデザイン書コーナーが存在するということに切っても切れない関係を感じるとともに、書棚で完全に分断された両者の隔たりも感じる。この書棚を破壊するというのも、ひとつの生き方なのかもしれない。

保育園に迎えに行くと、シヨンの元気がない。家に連れて帰ると、寝込んでしまった。シヨンが最初に咳をし始め、それからサクとヒマに伝染った。その考えが間違いであることに気付く。最初の咳は関係なかったのだ。シヨンが最後の感染者だったのだ。6時を過ぎて病院は閉まっている。様子を見ることにする。昨日の残りのカレーだけでは足りないだろうと、iPadで「ほうれん草ゆがき方」をググる。初めてほうれん草をゆがく。麺つゆだけで味付けできることはクックパッドで調査済みだ。食べてみると、柔らかさも味もちょうどいい。ヒマとサクは大喜びで食べている。グーグルのアルゴリズムとクックパッドに感謝する。もちろんレシピの投稿者にも。おいしいカレーとほうれん草だが、シヨンは一口も食べることなく、ソファでぐったりとしている。熱が高い。水分もとれていない。時々大声で泣きながら、夢でも見ているかのように何の脈絡もない言葉を発している。ヒマは変なこと言っていると笑っているが、父親は心配する以外に何もできない。少しでも悪化したら救急病院に連れて行こうと、いつでも出かけられる心の準備だけしておく。ヒマもサクも寝て、リビングにはシヨンだけになる。落ち着くと、頭が冴える。冷蔵庫に熱冷ましの坐薬があることを思い出す。無理に熱を下げる必要はないと言うが、うなされているこの状況は薬を使うタイミングだろう。坐薬を入れると、ほどなくして自分で寝室に行って寝てしまう。ひと安心ではあるけれど、明日は保育園を休んで病院に行くことになるだろうし、明後日の運動会への参加は絶望的だろう。実家の母から運動会を見にゆくというメールが届く。サクは運動会に参加するだろうから、人手は多いほうがいい。当日の動きをまったく予想できないまま、気分を変えて家事を済ませる。

十分に夜遅く、つまり操作しているユーザーが少ない時間帯を狙って、バージョンアップ作業を行う。定期作業なので流れは体が覚えている。けれども、体ではなく頭を使って1ステップずつ慎重に進めていく。コーヒーを淹れたが、なんだか体調が悪くて受け付けない。父親まで体調を崩すのだけは避けなければ。ほとんど家具のなくなった部屋の真ん中に小さな机と座椅子。人が生活するには、それほど広いスペースは必要ない。作業の待ち時間に家の中をかたんに掃除してまわる。この家は4人家族には少し広い。でも、三姉妹がみんな小学生になる頃には狭くなるのだろうか。まあ、先のことを考えても仕方ない。離婚が決まった時に友人に打ち明けると、問題がシンプルになったと言われた。その通りだ。今日を生き延びる。それをただ毎日繰り返す。行きたいところに行き、やりたいことをやればよい。バージョンアップが終わり動作確認をしてMacBookを閉じる。今日はどうにか生き延びた。明日はどうだろうか。

目が覚めると、真っ先にションを見る。おとなしく寝ている。触ってみる。熱い。部屋で日記を書く。ヒマも起きてきて、マンガを読んでいる。保育園組の起床時刻になり、サクを起こす。いちおうションにも声をかける。朝食を食べるかという問いに、力なく首を横に振る。ここまでは想定内だ。だが、サクが腹痛を訴えることは想定していない。覚悟を決める。同僚に子どもを病院に連れて行った後は自宅で仕事をする旨をFacebookメッセージで送り、保育園に2人を休ませると電話を入れる。ヒマを送り出すと、しばらく自室で仕事をする。ションもサクと同じく点滴を受ける可能性が高い。早めに家を出ようと考えていたが、結局、11時になって病院へ向かう。歩く元気のないションのために車を出す。車を手放したら、こういう時に不便になるだろう。サクの腹痛は治まっていたが、保育園は遅刻が許されない。ひとりで留守番をさせるには幼すぎる。2人を車に乗せる。病院では予期していたとおり、点滴を受けることになる。サクを待合室に残し、病室のベッドで横になるション。うまく静脈に入らずに3度やり直しながらも、大笑いしているベテランナース。こういうのは大事だと思いながらも、ションには災難でしかない。ベッドに力なく横たわる子どもは、普段よりも小さく見える。

点滴2本目。病院は昼休みに入っている。待合室で遊んでいたサクを呼び寄せ、隣のブースでピーターパンのDVDを観せる。ションも観たがる。元気が出てきたようだ。コーヒーとお菓子をいただいたので、腹を減らしたサクにお菓子を食べさせる。点滴3本目。ションの顔色が良くなっていく。トイレまで何往復もするが、足取りがしっかりしている。熱はまだ高そうだ。奇跡的に明日の朝までに体調が回復していたら、運動会に参加させても大丈夫だろうか。年長のションは最初で最後の保育園の運動会となる。不思議の国のアリスのDVDを観ている姉妹の横で、クリエイティブ系の雑誌を眺める。クリエイティブが広告用語になっていることに、いつも違和感を感じている。それでも、ブックオフで100円で売られていたその雑誌は、普段接点のない広告業界を垣間見ることができておもしろい。広告業界には接点はないが、開発しているのはソーシャルメディアを使ったマーケティング支援ツールだ。広告業界の人と話をしてみるのもおもしろいかもしれない。何人かの顔が浮かぶ。病院にはiPhone以外のネット端末を持ち込んでいないし、バッグには資料や筆記用具さえ入っていない。だが、静かな空間でほぼオフラインになることで、いつもとは違う角度で自分たちのプロダクトを眺めることができる。この環境を日常的に作ることも最近の課題のひとつだ。そしてもうひとつ、同僚とあるいは部外者と積極的にコミュニケーションをとること。一時期の引きこもり状態から脱して、様々なイベントに参加してはイベントレポートを福岡のコミュニティブログに寄稿している。それが、三姉妹にかかりっきりになってしまい、イベントに参加できず記事の寄稿も停滞してしまっている。毎月開催しようと目論んでいた主催するイベントも、今月の開催は難しいだろう。引きこもってはいけない。視野を広げなければ。具体的にどうすればいいのか、まだアイデアを思い浮かばずにいる。

4時間の点滴が終わり、3時に病院から開放される。病気の子にジャンクフードを食べさせるのは

どうかと思ったが、ションが食べたがっているハンバーガーを買って帰る。疲れが溜まっているためかジャンクフードの海で溺れたい父親は、エビのパーティを5枚重ねたエビツリーバーガーを買う。さすがに全部食べると溺死するだろうと、子どもたちのハンバーガーに1枚ずつ挟む。もちろん、病気の子も一緒に溺れさせようとしている罪悪感を感じている。だからこそ、普段の夕食にはレトルト食品をできるだけ使わないようにしている。栄養、栄養。一度きちんと勉強しなければならないだろうと思う。完璧は目指さないとしても、感覚だけでそれなりの夕飯が作れる気配はない。同じように掃除についても勉強しなければ。ホコリ取り用の紙で目につくところのホコリを拭く。カーペットを外ではたき、家中に掃除機をかける。一番ホコリが溜まっていそうな寝室兼子ども部屋は、ションが寝ているので諦める。目が回ってきて、リビングに横になる。子どもの病気などイレギュラーなイベントへの対処がまだできていない。体を休めるため、しばらく仮眠をとる。

夕飯の準備。食事を作るというタスクは後回しにできない。カレーが少しだけ残っている。人数分足りないので麻婆豆腐を作る。目が回って船酔いのようなようだ。船酔いで思い出す。かつて航海中に新鮮な野菜や果物が摂取できなくて壊血病になっていたという話だ。生野菜を摂ろうと、キャベツを千切りにする。キャベツにビタミンCがどれくらい含まれているかは分からないけれど。ほうれん草のおひたしも残っている。カレーには野菜を大量に入れているし、野菜はけっこう摂れているかもしれない。緑黄色野菜を増やした方がいいななどと考える。やはり多少は勉強しないと、知識が乏しすぎる。家庭科の成績はよかったが、内容はほとんど覚えていない。ペーパーテストよりも実践が大切か。カレーと麻婆豆腐を選択制にして、三姉妹はカレーを選択したが、それっぽい食卓を仕上げる。ションも普段通りの量ではないが、カレーライスを口にする。明日は運動会だからと、早めに寝せる。まあ、運動会でなくても早く寝せるのだけど。今日は急ぎの仕事が残っている。

Twitterで「シングルファーザー」「シングルファザー」「父子家庭」を検索する。シングルファーザーを扱ったドラマや小説がいくつかるのを知る。1日程度の子守りでシングルファーザーを気取っている父親がいる。母子家庭に比べて父子家庭への支援が少ないという意見がある。福岡にいと震災や原発に対する感覚が鈍いとの同じで、当事者にならなければ自分ごととして見る事ができない。ミヤザキシヤは特にその傾向が強く、あまりに社会の問題から距離を置きすぎている。と考えたところで気分転換を終え、社会との接点である仕事に取りかかる。昨日のバージョンアップ後に報告された不具合を修正していく。ションの病院でいつもと違う頭の使い方をしたからだろうか、頭の回転が速い。次々に問題を解決していく。日付が変わる前までにすべての修正を終える。仕事が終われば、睡眠時間を削ってでもやりたいことはある。それでも、明日は運動会だからと、子どもたちに言い聞かせたことを自分にも言い聞かせベッドに転がり込む。

保育園の運動会。シヨンの熱は下がっていない。ヒマに留守番を頼んで、サクを保育園に連れて行く。人が多い。普段広いと思っていた保育園も、これだけの人が見に来れば移動するのも楽ではない。隣に見える小学校の運動場では野球部が練習をしているが、やたらと広く見える。サクを先生に引き渡し、2階のバルコニーに上がる。各家庭のシートがびっしりと敷き詰められている。保育園や幼稚園、小学校には保護者間に多数の暗黙知が存在する。運動会には何時頃に並んでどのあたりの場所を取るべきかもそのひとつだ。知るものと知らざるものとの情報格差が、運動会をどれだけ楽しめるかに影響を及ぼす。シートを踏まないように2階のバルコニーの手すりに密着して開会式を見守る。1階の様子をうかがうと、たくさんの観覧者がいる。事前に配布されたプリントには、1階での観覧はできないように書かれている。実際には、1階でも観覧できるという暗黙知を共有する人々で賑わっている。知らざるものであるミヤザキシンヤは窮屈な体制でファインダー越しに園庭の我が子を追いかける。

ヒマがその祖父を連れて保育園にやってくる。携帯電話で連絡を取り合うが、お互いの正確な場所は把握できない。ヒマは単独で自由に移動しているようだ。三世代バラバラのまま観戦する。父は運動会のプログラムという形式知すら持っていない。孫の出番も分からず、さぞ不便なことだろう。手元のプログラムを見ると、次はかけっこに出場することが分かる。走りだしたサクを2階から見守る。赤白帽子を目深に被ったサクが、どんな表情で走っているのかまったく分からない。次の出番に備えて、1階に移動することにする。1階をうろうろしていると、自由参加の保護者の綱引きのアナウンスが流れる。人手が足りないようだ。今日はめずらしく体調は悪くない。こういう時にはイベントに積極的に参加する父親像を見せるべきだろうか。担任の先生と目が合ってしまったことが決定打となり、靴を履いて入場門の方へ走って行く。結局、綱引きは負けてしまったが、頑張ってたねと言うヒマのひとことに喜ぶ父親。仕事も家事もそこそこ頑張っているつもりだが、子どもはそうは認識していない。やはり特別なイベントで見せるしかないのだ。

午前中の観覧を終えると、集まって昼食を取る場所を探す。どこもシートで埋め尽くされ、やっと見つけたシートの間隙は日に照らされ高温になっている。狭せまと弁当を広げる。母が用意してくれたのは、運動会の弁当らしい弁当だ。ふと隣を見ると、子どもにスーパーのパンを食べさせている一家がいる。実家からの応援がなければ、我が家もそうになっていたろう。ただ、運動会の弁当かくあるべしという固定観念は捨て去らなければならない。今は21世紀なのだ。いろんな弁当があっていいし、件の一家も運動会が終わった後には、回っていない寿司や食べ放題ではない焼き肉を食べに行くのかもしれない。家族の数だけ家族のあり方が存在する。他者がどうこう言うものではない。午後には親子競技に参加して、その後、玉入れの玉を1つだけ投げて後は棒立ちだったサクの応援をする。子どもにも、子どもの数だけ世界がある。サクの世界では一球入魂なのだろう。

保育園での初めての運動会が終わり、運動会における暗黙知の重要性を確認するとともに、来年に向けて暗黙知を獲得できたことに満足する。来年は知っている者として参加することになる。午後から観戦に来た母、ヒマとサクと一緒にシヨンの待つ家に帰る。朝の早かった父は寝ており、シヨンはひとりで遊んでいる。帰宅すると、母がトースターを掃除してくれる。さすが専業主婦歴数十年の大ベテランだ。息子はそもそもトースターを掃除するという概念すら持っていない。弁当の残りも、弁当に入りきらなかったおかず、果物をたくさん残していつてくれる。これだけあれば、しばらく充実した食生活を送れそうだ。それに、大量の栄養ドリンク。さすが、分かっている。両親を見送ると、どっと疲れが溢れ出してきて、床に寝転がる。そのまま意識が遠のいていくのを感じる。しばらくして、目を覚ます。体は重たいが、心は軽い。なにしろ、夕飯の用意をしなくていいのだ。最近になってやっと夜には冷えるようになってきた、いつもはシャワーで済ませているが今日は浴槽にお湯を溜める。ゆっくりと、と言っても浴槽に浸かっているのが苦手なのですぐに出るのだが、風呂に入り、弁当の残りをきれいに皿に盛り付けて並べる。洗い物も少ない。贅沢の定義が上書きされてゆくのを感じる。

子どもたちも疲れているのか、すぐに寝てしまう。外に出ていないシヨンも、遊ぶ相手がいないのでおとなしく寝ている。こういう時にはやりたいことをやるチャンスなのだが、頭が回らない。本を読むのも難しそうだ。映画を観ることにする。iTunesの中の映画のリストを眺める。何も考えずに観れる映画がいい。数年前にすでに観たことがあったが、「バトル・ロワイアル」を選ぶ。殺人エンターテインメントなのに、妙に教訓じみたところに持っていくギャップに、はなから頭を使おうという気は起こらない。久しぶりに頭を空っぽにして時間を消費する。もっといろんな映画をそろえて、気分に応じて選択できるようにしたい。しかし、平日はもちろん、休日も平日の不足分を補おうと思えば、映画を観る時間などない。それでも、いつもと違う頭の使い方をする時間を作るというのは大切なのだろうと思う。こんな生活だからこそ、クリエイティビティを高めなければならない。そのためには、いろいろな頭の使い方をするというのが重要だという気がする。また、そのことに日々のストレスを軽減する効果があることを期待している。

日曜日はだいたい同じような朝を迎える。iPhoneのアラームを鳴らさないようにしていて、いつもより遅めに起きる。三姉妹はリビングで行儀よく並んでテレビのアニメを観ている。何代目のプリキュアだろうか。もうついていけない。子どもの物欲を刺激するCMをヒヤヒヤしながらやり過ごす。三姉妹は反応しない。買ってもらえないことが分かっているのだろうか。それはそれで悲しい気もする。まあ、ダンボールで作った家に大喜びしていいのでいいだろう。父親のような資本主義経済依存症にならないことを祈る。子どもたちがテレビを観ている間は自分の好きなことができる自由時間だが、今日は一緒にプリキュアを観る。子どもたちとの距離を縮めたい。むかし話のアニメまで観終わると、食卓を囲んで平日より遅めの朝食をとる。4人家族になって、四角いテーブルがちょうど合うようになった。朝食の後片付けをして、どこかに遊びに連れて行きたいところだが、ションの体調はまだ万全ではない。天気も悪いので、子どもたちを家の中で遊ばせることにする。父親は昨日の疲れからか、横になるとすぐにウトウトし始める。サクが抱きついてきて、父親の顔を指で触っていく。いかにも親子っぽいと感じる。

気がつくとき昼になっている。だが今日は焦る必要はない。昨日の運動会の弁当のおかずが残っているし、朝のうちにご飯を炊いている。レンジをフル稼働して、昼食を準備する。三姉妹には部屋の片付けを依頼するが、片付け方についてもある程度は知識を与えなければならないのだろうと常々思っている。午後からは自室でMacBookを開く。システムに不具合が発生していないことを確認する。FacebookやTwitterのタイムラインを確認するが、外に遊びに連れて行ってもらっている幸せそうな子どもたちの写真に胸が痛む。どこかに連れて行ってあげたい。結局のところ、ミヤザキシンは他人との相対値でしか幸せの度合いを測れていないのだ。小学校の懇談会で担任の先生に言われた、子どもが一番幸せなのは親が幸せな顔をしている時だ、という言葉が脳裏をよぎる。幸福感を感じるのが苦手な父親は、子どもの目にどう映っているのだろうか。3時のおやつに、頂きもののチョコレートで4人で食べる。チョコレートには洋酒が入っていて、酒の苦手な父親は微妙な顔をする。それでも、三姉妹は楽しそうにおやつを楽しんでいる。全員を引き取って良かったと思う。いや、最初から三姉妹をバラバラにするという選択肢など考えもしなかった。これでいい。

明日の朝食の食パンがないという危機に直面する。買う時には6枚切りを3袋買うようにしているが、よく考えるとそれでは5日も持たない。子どもたちを買い物に誘うが、フラれて1人でコスモスに向かう。食パンはここが安定して安いということだけは知っている。あとの買い物は適当だ。車を手放したら近くのスーパー、やや割高な、に行くしかなくなる。今のうちに安いパンを買い込もう。先日のリベンジにと、ホットケーキミックスも購入する。もう少し家を開けても大丈夫だろう。気分が沈んでいたのも、TSUTAYAに寄ってブラブラする。この店舗は品揃えが少ない。やっぱり留守番させている子どもたちのことも気になって、すぐに店を後にする。朝と同じく日曜日の夕方もだいたい過ごし方が決まっている。三姉妹は、ちびまる子ちゃんからサザエ

さんのコースを堪能する。サクだけはサザエさんに興味を持たずに寝てしまうことがあるので要注意だ。子どもたちがテレビを観ている間に夕飯の支度をする。弁当で肉が続いたので、卵かけご飯に味噌汁でいいか。母の作ってきてくれた生姜の佃煮を出すと、ヒマは喜んで食べる。レシピを習っておこう。緑黄色野菜も食べさせたい。カボチャを煮る方法を調べよう。

ションとサクが寝て、ひと息つく。FacebookとTwitterを見ていると、「東京シャッタガール」の映画の予告動画にたどり着く。原作は1話しか読んだことがないが、どんな感じなのかは把握しているつもりだ。映画の予告編はかなり重たい雰囲気醸し出している。映画も気になるが、今は原作のさわやかさを味わいたい。全力で気分転換。ヒマを残して本屋に走る。現在まで出版されている2巻まで買って帰る。さわやかだ。街歩きがしたくなる。街歩きには一眼レフよりレンジファインダーカメラが似合いそうだ。だが、こんなところで物欲を刺激されている場合ではない。子どもたちと一緒に街歩きをしてみたいと思う。その土地の歴史だとか伝説だとかを調べて。その土地の食べ物を食べて。レジャーとしても体験学習としても優れている気がする。街歩きではないが、太宰府天満宮に行ってみるのもいいかもしれない。飛梅の話は子どもたちにも分かりやすそうだし、ミヤザキシンヤが行きたがっている隈研吾が設計したスターバックスもある。それに、梅ヶ枝餅。車を所有している今がチャンスだ。近々行ってみよう。

元気が出てきた。三姉妹のシングルファーザーになって3週間目。2週間と少し乗り越えたのだから、これからも大丈夫だろうと考えていた。しかし、気を張っていたから乗り越えられたのだという気もする。だが、4人家族の生活は波打ち際の砂の城のような儚さを感じる。少し気を抜くと、一気に崩れてしまいそうだ。ストレスは感じていない。むしろ、離婚してからストレスは一気に解消された感覚すらある。それでも、一方で、疲れが溜まっている気もする。ストレスを受け続けていて、しかもそれに気が付かないというのは一番危険だと思う。ミヤザキシンヤは今、無事なのか。それは本人にも分からない。ふとした拍子に元気が出る瞬間。将来が明るく見える瞬間。それを手がかりに生き延び続けていくしかない。

2013年9月30日 月曜日

何とか生き延びることができた。9月の終わり。離婚からシングルファーザーへ、三姉妹の立て続けの病気。たぶん日記を書いていなかったら、怒涛の如く流れてゆく日々を記憶に留めておくのは難しかっただろうと思う。やっとひと息つける。そう思っていた。それが起こるまでは。

正直、ミヤザキシンヤ本人ですらも、何が起こったのか理解していない。いつものように、起床して寝室から自室に移動し、座椅子にもたれかかる。ぼーとしながら頭のエンジンがかかるのを待つ。次の瞬間。部屋の外で両膝を床について、額をガンガンと床に叩きつけている。何が起きているのか分からない。ひとつひとつ確認していく。額を床に叩きつけていることを理解するのにしばらく時間がかかる。自分が何をしているのか、ゆっくりと理解したところで、その行動は止まる。自分で止めたのか、自然と止まったのかは分からない。床を見ると血が滴り落ちている。左目の上から血が出ている。立ち上がり、このときはフラつくことなく立ち上がることができた、キッチンペーパーを手にとって傷口を圧迫する。左肩も痛めている。傷口を抑える手に力が入らない。ヒマが起きてくる音がする。あわてて床に散らばった血を拭く。座っていたはずの座椅子に戻り、ひと息つく。何が起こったのだろう。鏡を見ると、目の上はパンチをもらったボクサーの様に腫れ、ざっくりと傷口が開いている。救急箱を引っ張り出し。消毒をして、ガーゼをテープで止める。傷の痛みよりも肩の痛みが強い。腕が上がらない。それでも平気な振りをして保育園組を起し、いつもと同じ朝を迎える。

保育園からの帰り、そのまま近くの整形外科に寄ってみたが休院している。一番ひどいのは肩の痛みだが、目の傷も深そうだし、意識をなくしての異常行動のことを考えると、総合病院で診てもらいたいという気がする。iPhoneで紹介状なしで診てもらえる総合病院を探す。車を走らせて病院に向かうが、左腕はハンドルを回せない。しかも意識をなくしたのだから、車の運転などすべきではなかったと、後になって気づく。まだ新しい病院は、庭に大きなオブジェが配置されていて、玄関を入るとまるで高級ホテルのロビーのような作りになっている。案内係が2人並び、その横では自動演奏のグランドピアノが音楽を奏でている。思わず怯みそうになるが、片親家庭の医療証を持っていれば最大で800円の支払いで済む。受付に進む。問診票には転倒と記入し、整形外科を選択する。9094番という番号が与えられる。整形外科では、レントゲン撮影をして骨に異常がないことを確認される。院内は完全にシステム化されていて、デジタル化されたレントゲン写真はリアルタイムに医師の元に届き、医師がインプットしたデータは直ちに他の診療科に共有される仕様のようだ。今朝起こったことを、自分でもよく分からないまま、話す。骨には異常がなく整形外科の診察は終わり、脳神経科と形成外科の診療が必要であると診断される。9094というIDの患者に適切なコースが設計される。流れに乗って脳神経科で診察を受ける。医師はデジタル化されたカルテを見つめながら複雑な表情をしている。最終的に、血液検査、心電図、CTスキャン、脳波測定を行うことが決まる。その合間に形成外科に向かう。傷口を見たナースが、ああ、とため息をつくのを聞いて、傷が深いことを悟る。診察室で写真を2枚撮られて、すぐに縫

合手術が始まる。麻酔のおかげで痛くはないが、なんとも不快な感覚が広がっていく。終わるとテープでガチガチに固められ、左目の視野が半分になる。車で来たことを再度後悔する。

ID9094のプロセスに従って血液検査、心電図、CTスキャン、脳波測定を行う。すでに3時をまわっている。空腹感との勝負になる。心療内科の薬だけは、検査が終わった段階で飲んでおく。これ以上体調を崩したくない。脳神経科の待ち時間は長い。無意識での異常行動の原因が分からない以上は、デジタルデバイスのディスプレイを見つめるのははばかれる。昨日買った「東京シャッターガール」の続きを読む。気持ちが落ち着くのを感ずる。自動演奏のピアノは、ドビュッシーのアラベスクを奏でている。マンガをバッグにしまうと、ゆっくりと目を閉じる。ミヤザキシンの身に何が起きたのか、それよりも今後同じような症状が起これるのか、それだけが気になり、そして不安でもある。痛みは我慢すればいい。我慢は得意だ。子どもたちに危害が加わらないか、それだけが不安だ。肩の痛みがひどくなり、ナースに整形外科から湿布を処方してもらうように依頼する。それもすぐさまシステムに組み込まれ、整形外科の化膿止めと痛み止めとともに処方される手はずが整う。ナースたちは接客業のような振る舞いで、医師たちはじっくり十分に説明をしてくれる。この病院のことはよく知らずに飛び込んできたが、いい病院だと感ずる。ピアノはドビュッシーの別の曲を演奏している。

脳神経科の医師に検査結果の説明を聞く。懇切丁寧な説明をまとめると、異常は認められないとのことだ。ただ、てんかんの可能性は否定できないと言う。身近にてんかん患者のいるミヤザキシンは、てんかんの基礎知識を持っている。30分程度の脳は測定ではてんかんの波を観測できるとは限らないということも。父子家庭になって父親が病気になるというのは、ドラマではよくありそうな展開だ。ここで異常が見つければ、そのドラマのタイトルを決めないといけなところだが、今日のところは様子見となる。発作、と呼ぶのか分からないが、あれがまた起こるのかどうか。不安に思っていると発作を呼ぶとも聞いている。再発したらその時で、異常があると判断できていいことじゃないかと考える。神経が図太くなければ三姉妹のシングルファーザーなんてやっていられない。震災後、ミヤザキシンはそれを自分ごととして捉えられないことに悩んだが、振り返ってみると自分のことですら自分ごととして捉えていないことに気付く。だからこそ、飄飄としていられるのだ。いのちの電話に電話しても、あなたの話は私の心に響かないと電話を切られたことがあるが、それもあまりに飄飄とし過ぎていたからなのだろう。こんなことがあっても、精神的には余裕だ。ミヤザキシンは飄飄とした折れない自分に感謝する。

家に帰ると、日常が待っている。夕飯の支度をし、三姉妹を風呂に入れ、食事が終われば食器を洗い、洗濯機を回す。肩が痛くて思うように家事ができないことだけが、いつもと違っていた。負傷した父親を率先して手伝おうとするヒマの心遣いがうれしい。それでも、片付けをしない子どもたちに腹を立てている振りをして、自室にこもる。保育園からの手紙や、大量の郵便物を仕分けする。それからしばらくダラダラとしていたが、とりあえず睡眠時間を長めに取ろうと、いつもの睡眠導入剤を飲んで布団に入る。iPhoneのアラームは切っておいた。朝早く起きるのは

怖い。ヒマには父親が倒れていたらすぐに母親に連絡するように伝えている。明日は、会社のプロジェクトで急に自分が抜けても前に進むように調整をしよう。すでに意識の遠のく頭でこれからのことを考えながら、眠りにつく。

1ヶ月限定と決めていた日記も最終日となる。最後の最後に事件が起こるのは予想することすらできなかったが、それでも3週間のシングルファーザー生活を乗り越えたことで、これからもやっていけるという自身がついている。来月からは、すこし休暇を取りたいが、仕事にも完全復帰して新しいプロジェクトを進めていきたい。ミヤザキシンヤは欲張りだ。あれもこれも、うまくやりたい。飄飄としたミヤザキシンヤなら、困難を困難とも思わず、いつもどおりやっていけそうな気がしている。三姉妹も自由奔放に生きている。何も問題ない。2013年9月をそう結論づけた。

2013年9月

<http://p.booklog.jp/book/77661>

著者：ミヤザキシンヤ

著者ブログ：<http://shunsuk.hatenablog.jp/>

Twitter：[@_offline_](#)

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/77661>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/77661>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ